AACK 京都大学学士山岳会 No.40

Newsletter

December 2006

http://www.aack.or.jp

目次

川旅　シーンジェック　寺島　彰……1
AACK人物抄　酒戸弥二郎さん（一九〇六～一九七六）　平井一正……11
ビアフォー氷河・ヒスパー氷河トレッキング（二〇〇六年六月二四日～七月二四日）　阪本公一……16
アフリカ縦断の旅　第三部　田中二郎……19
南極観測五〇周年記念　第一次隊員　芦峅の五人衆に聞く　新井　浩……26
中・高年登山者のための一五の医学的備忘録　松林公蔵……28
栄誉・受賞のお知らせ……30
会員異動……30
編集後記……30

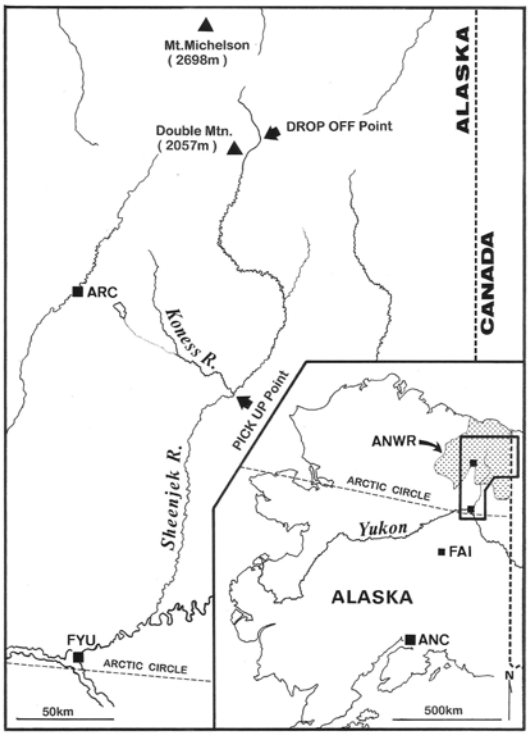
川旅　シーンジェック

寺島　彰

極北の寒村アークティック・ヴィレッジを飛び立ったチャーター機（セスナ一八五・スカイワゴン）は、ブッシュ・パイロットKirk Sweetsirの操縦によって、ブルックス山脈の山あいを縫うように飛び続けている。眼下の谷間には、たおやかなツンドラが既に夏の盛期を過ぎた淡いベージュ色で広がり、その中を小川が蛇行しながら流れ、トウヒが疎らに生える。

一方、機の左右には二〇〇〇メートル級とはとても思えぬ山々が地層を鮮明に浮き出させ、その侵食の進んだ荒々しい岩峰をむき出しにしている。そんな予想もしなかった光景のコントラストに息を呑み心を奪われている内にも、セスナはシーンジェック上流へ向け谷を詰め山越えに入った。

アラスカで川旅を、という衝動に突き動かされたのは二〇〇一年春、やはりアラスカの北極圏に向かう小型機から、広大な雪原に白くうねる結氷した川面のパターンを見下ろしていた時だった。まるで生きているかのように蛇行する氷の帯は、余りに新鮮で美しかった。その時以来、アラスカでの川旅というイメージに



地図中略語、ANWR：北極圏国立野生生物保護区（Arctic National Wildlife Refuge）、ANC：Anchorage、FAI：Fairbanks、FYU：Fort Yukon、ARC：Arctic Village

取り憑かれてしまったのである。その夢が今、AACKから助成を受けるという幸運にも恵まれて、ようやく実現した。

分水嶺を越えたセスナは、シーンジェックの支流の一本を下流に向け滑らかに辿りながら、やがて本流上空へと侵入した。谷巾が一気に広がり、河床の一部は盛夏を過ぎても、いまだ氷床に覆われている。そして川辺に広がるツンドラでは、何とグリズリーが散歩しているではないか！　次々に繰り広げられる思わぬ展開に気持ちが昂まっていく中、機体を大きく傾けながら旋回降下したセスナは、急峻な山から押し出された小さな扇状地のDrop-off地点に、こともなげに着陸した。

（一）シーンジェック

北極圏野生生物保護区というその名前を聞くだけでも思わず身震いしてしまうほど魅力的な地を流れるシーンジェック。最源流はブルックス山脈東部のロマンゾフ山域にある氷河。この山域で最も高い山ミカエルソンでも二六九八メートル、ロマンゾフでも二五七二メートルという標高しかないのだが、そこは北極圏。しっかりと氷河を発達させた立派な山々である。この氷河を源頭に発したシーンジェックは、グレイシャーミルクによってやや白濁しているもののそれは上流だけで、普通の水位ならば支流を合わせる程に透明度も上がって美しい川になる。そして約五一〇キロを流れ下り、フォートユーコン付近で大河ユーコン川に合流する。

日本の約四倍、約一五二万平方キロの広大な地アラスカには多くの川が流れ、その総延長は約五九万キロとも記載されている。そこには主要一二水系が挙げられているが、これらの中で最も大きなのが大河ユーコン水系である。

今回アラスカで川を旅する以上、日本では組めないような長い川旅を目指した。つまり、日本ではいくら長く下ると言っても、それは十勝川の三泊四日であったり、釧路川の四泊四日。そこで、少なくとも一〇日以上の川旅という観点から「ALASKA RIVER GUIDE」(K. Jettmar 一九九三、Alaska northwest Books) に記載されている七八本の川を検索したところ、挙ってきた候補の一つがシーンジェックだった。

もっとも、本当のことをいえば、シーンジェックを下ってみたいという気持ちは、検索する前から決まっていた。それは、写真家でありエッセイストでもあった星野道夫の書いた「ノーザンライツ」（一九九七、新潮社）に〝約束の川〟として紹介されている文章があり、それを出版当初に読んで以来、魅かれていたのである。

アラスカの川としては、ノアタック川・アラトナ川・ワイルド川・ジョン川などブルックス山脈中西部の川はそれなりに日本の関心あるカヤッカーの間でも知られている。しかし、東部のシーンジェックとなると、アラスカの人々の間でさえも、知る人ぞ知る川になる。つまり今回の川旅では、シーンジェックを旅する事自体が大きな目的になったのだが、ただ折角そこまで足を延ばすのであるから、ツンドラの大地に生きる様々な生き物達にも出会いたいと思っていた。とりわけ、アークティック・グレイリング（Arctic Grayling）は是非見たかった。そして、それは単に見るだけではなく、この手で触れ、さらには味わっても（！）みたかったのである。もっとも、これらがどこまで叶うかは別の話、としてではあったのだが…。

このような経緯で準備を進めていく中から、川旅のイメージが輪郭を明らかにし始め、

Drop-off地点にて。Bush PilotのKirk Sweetsirと、荒れ地でも離着陸できるように極太のバルーンタイヤを履いたセスナ185。乗員とも４名乗り。

現地在住の知人を通しても情報収集を進めている中、AACKから『海外登山・探検』助成決定の嬉しい知らせも舞い込んで来た。さらにブッシュ・パイロットKirk Sweetsirとのメールによるスケジュール調整などを経ながら、計画が固まった。

川は、北極圏国立野生生物保護区（ANWR）を流れるシーンジェック。関空出発は二〇〇六年八月三日。アンカレッジからフェアバンクスまでは、アラスカ鉄道。そこから定期便（十人乗り・セスナ二〇八Bグランドキャラバン）でアークティック・ヴィレッジに飛び、チャーターフライトに乗り継ぐ。そして八月一〇日、ダブルマウンテン（標高二〇五七メートル）北東の扇状地（標高八四四メートル、N68° 50.01', W143° 33.06'）のDrop-off地点まで、直線距離にして約一二〇キロを送ってもらう。迎えのPick-up地点はシーンジェックとその支流コニス川との合流点（標高三六一メートル、N67° 44.58', W143° 43.42'）。この間（漕行移動距離二九〇キロ）を二週間で単独漕行。そして八月二五日、合流点からフォート・ユーコンまで直線距離にして約一四〇キロを再びチャーターフライトで飛び、帰国は八月三一日。という計画である。

（二）川旅

清流シーンジェックの筈だった。ところが様子がおかしい。確かに、「今年のアラスカは夏らしい晴天がなく、雨が多い」というメールは届いていたのだが、これほどとは思わなかった。アンカレッジでもフェアバンクスでも毎日雨がち。それが川に入ってからも続いている。

もっとも、雨自体に対しては決して陰鬱になるものではなく、ゴアテックスの上下雨具をしっかり着込み、つば広の帽子を被ってしまえば、雨のパドリングもなかなか乙なもの。「これが、北極圏のパドリングだ」と思うと、ガスに煙って周囲に流れる水墨画のような風景も実に風情がある。しかしながら上流の水がグレイシャーミルクの影響で灰色がかるのは良いとしても、下るにつれて流れ込む土砂の影響で水は茶色に濁り始め、清流どころか濁流である。

それだけならまだしも、当然のことながら降雨により水位が上がる。そしてこの水位上昇とは、川下りの観点からすれば、平常水位時には穏やかな川も急流となり、川面の状況が豹変することを意味する。

それにしても、水位は日々上昇し、夕方に船を岸に引き揚げておいても、翌朝には水深三〇センチの水面にプカリと浮かんでいたことも。また時には前夜の焚き火跡も水没し、水面には灰と炭が焚き火跡そのままの形で浮かんでいたりした。

このような状況であるため、テント場によっては、いつでも脱出できるように予め不要な荷物を舟に積み込み、テント内には必要最小限の荷物だけで寝たこともあった。

川面はどうかというと、上流域の方が川床勾配が緩いのか、のんびりした川下りを楽しめたが、中盤からは相当に激しい早瀬が頻繁に出現するようになった。水温は五℃と極めて冷たいため、「沈」すると、その結果が厳しいことになるのは目に見えている。

川は予想以上に規模が大きく、増水により中盤以降は流れ巾で三〇～五〇メートルもあり、そこへもって来て、見たこともないような大きなボイルがいくつも沸き立っていたりする。相当早い流れが川底の大岩に当たっているのだろう。漕ぎ渉る上で危険はないものの、あまり気持ちの良いものではない。

また川幅一杯にストッパーだらけの荒瀬を、力負けしないようにガンガン漕いでいる時には、余程前方に注意しなくてはいけない。というのは、所々に、とりわけ大きな波が上

Double Mtn. 東側、緩勾配の広い河床では流路が編目状になっている。そしてその一部には、8月11日だというのにまだ溶けきれてない氷床が、厚さ約1mも残っている。

流側に逆巻く牙を剥いているからである。この水中の大岩によって波頭が砕けるストッパーは、当然同じ場所で発生しているわけだが、流れに乗った船から見ていると、まるでジョーズが大きく口を開け、こちらに突進して来るかのような錯覚すら与える程の迫力がある。

もちろんこうした大波は当然避けるべきなのだが、ある時、「避け切った」と思えた瞬間に、全く予期せぬ後方からの強い流れによって一気に押し戻され、その最も避けたかった大きなウエーブのストッパーが眼前に迫ってきた。もはやその時点で回避する選択肢はなく、ましてや漫然と当たればひとたまりもなく引っくり返されてしまう。これは反射的に強い一掻きで勢いを付けると、そのまま大波に思い切りパドルを突き立て、かわし気味に波を被りながら全力で乗り切った。

これも、我が愛艇リンクスがセルフベイラー（自然排水）構造を備えたダッキーという激流対応の船であったからこその事で、リンクスに感謝。

このようにパワフルでボリュームのある濁流シーンジェックはツンドラの原野をそれこそ自由奔放に流れ下り、当然のことながら、そこには護岸工事などというものに縁がない。つまり、屈曲部の外側は流れによって浸食が進むのだが、その結果、それこそ数百年、イヤひょっとすると千年近くに渡って堆積してきた蘚苔類や地衣類の厚いツンドラマットが川へ崩れ落ち、また厳しい年月を生き長らえてきたトウヒが川へ倒れ込むことになる。その今にも崩れ落ちそうなマットには、ベア・ベリーがそれでも赤く丸い実をころころと稔らせ、足元を洗われ斜めに傾いたトウヒは、倒れまい倒れまいと必死に踏ん張っている。

ところで、そのような浸食を受けてむき出しになった土手の断面を良く見ると、ツンドラマットの下の土砂層の中から握りこぶし大の丸石が多数顔を覗かせ、下部の石は既に水で洗われて光り始めている。これらの丸石は、そこが大昔、シーンジェック川の河床であった時に、研磨されつつ運ばれてきたものに間違いない。それが今、長い地中での眠りから醒めて、再びシーンジェックの川石として復活し流れの中に戻ろうとしているのだ。

一方、屈曲点内側では逆に堆積が進み、その水辺前線には早くもヤナギの幼木が根付き始め、ローズヒップが真っ赤な実を艶やかに光らせていたりする。と同時にそこは川石が土砂に埋まり始め、いつの日にか再び甦る日まで眠りに就く場でもある。

ことこのように、屈曲点の外側と内側とでは、「浸食」と「堆積」、「死」と「生」、「復活」と「眠り」とが常に同時進行している。屈曲点毎に繰り広げられる輪廻転生。別に目新しい発見でも何でもないのだが、その現場に二週間もの間身を置き、それらのイベントを毎日繰り返し繰り返し目撃していると、まさに「川は生きている」ということが実感として認識されるようになってきた。

これまで随分沢山の渓流・河川を見て来たが、このような感覚を得たのは初めてだった。日本やヨーロッパでは人手の加わった川だったり、ヒマラヤ・チベット域ではありのままに流れる川も数多く見て来た。しかし、そうした経験を通しても、川に対して抱いていた認識とは、有機的な生命体の「生活の場」としての「川」、「無機的環境」としての「川」であった。しかし、シーンジェックで得たものは、川そのものが生き物、という合理的には説明困難な感覚だった。

今回の川旅では、増水し流れが早かったためもあるのだろう、足元の崩壊に耐えきれず、遂に力尽きたトウヒがまさに目前で水中へと倒れ込んで行く姿を目撃した。

この川に倒れ込んだトウヒはどうなるかというと、流れ方向に真っすぐ身を横たえながら流されていく。そしてこれが皆、根の方を上流に、幹の先端を下流に向け、時に幹を軸

8月18日、寒くて目が覚めた。何と、テントやリンクスも、うっすらと雪化粧。初雪だ。来しかたの谷奥を振り返ると、Double Mtn.（2057m）を始めとする山々が真っ白に光っていた。「これぞ北極圏!!」

にぐるぐる回転しながら流されていく。この四方八方に広がった根を、まるで水車のように回しながら流されていく後ろ姿を舟から見ていると、まるで断末魔の身悶えのようにも思われ、何とも異様な雰囲気すら感じさせる姿だった。

ただ見方を変えると、こうして舟と並走して流されている流木は危険ではない。問題は、岩か何かに流木のどこかが引っかかって、流れに対して横方向に固定されてしまった場合だ。これが一本だけならまだしも、このように流木が引っかかる場所には、時に多数の流木が川幅を広く塞いでいる場合がある。舟は、その横たわった流木の間をジグザグに漕ぎ抜けなければならないのだが、複雑で早い流れの中では相当困難な操船となる。そして…、ある時、バックフェリーグライドによる平行横移動の試みもむなしく、遂に避けきれずに、一本の流木に捕まってしまった。

これが極めて危ない。というのは、横倒しになった流木には、枝の折れ口がまるで刺のように多数突き出していて、これに舟が流れによって強く押し当てられたものには、いくら丈夫な我がリンクスでも穴が開く。リンクスは真横からもろに流れを受け、流木に押し付けられそうになる。それを片手で流木を支えることで多少とも衝撃を和らげながら、かつ転覆しないようにリーンをかける。急流のど真ん中である。船底への水圧を避けるためリーンによって上流側に傾けた舷側からは水が流れ込む。一体これからどうすればこの状況を抜け出せるのか…と半ば呆然となりながら考えようとするのだが…

ところがその時、思いがけない事が起こった。不意に、船尾がフワリと持ち上げられたかと思うと流木から離れ、船首が左回頭し、そしてそのまま流木を回り込むような動きを見せ始めたのだ。何故そのような反応を舟が示したのか、その理由は未だに分からないのだが、直ちにパドルを入れたところ、難なくその流木をかわして流れに乗ることができた。一体、何が起きたのだろう。思い返しても、あの状況は半ば絶望的と言っても良いようなブローチングだった筈なのだが…、それこそ、まるでシーンジェックに助けられたようなものだ。

いずれにしても、日々の増水で河相が険しくなった後半は、このような中での川下りになった。そこではなるべく早く障害物を発見して回避したり、または分流している所ではどちらの流れを選ぶのか、そうした方針を時速八キロ最速一八キロで移動し続けている中で速やかに決定し、それに向けたライン取りをしなければならない。

こんな具合であるから、一時も川面から目が離せなくなってしまった。もはや、上流域のように漕ぎながら現在地の地形と地図とを照合する暇さえない。ただ、その真剣勝負の緊迫感が何とも心地良い。我がリンクスはラ

激しい荒瀬があるかと思えば、静かな川面の広がる所もある。流速は十分あるので殆ど漕ぐ必要はないが、じっとしていると寒くなる。防寒のため、ゆったりと漕ぐ。

Brooks 山脈の山あいを抜け、極北の大地を流れるSheenjek。この日は午後から晴れ、穏やかで暖かな日差しの元、樹木もしっかり茂った大きな中州へ上陸。とりわけ素晴らしいキャンプ地だった。

フト特有の身のこなしで流れの屈曲に応じて右岸側から左岸側へ、そしてまた再び左岸側から右岸側へと軽快に渡って行く。

このような川下りでは、精神的緊張の持続を第一に、瞬発的にはそれなりの腕力も強いられる。そこで、特に注意力が散漫にならないように約三十～四十分を目処に何とか岸に着けて休憩を取った。それでも約三時間も下っていると、手の平全体が痺れてくる。これは寒さが原因ではなく、圧倒的な存在感を持つ流れの中でのパドリングに、自覚している以上の力を要していることを示しているのだろう。この痺れはマッサージすることで和らぐのだが、余りゆっくり休んでいると今度は寒さで震えがきてしまう。いずれにしても、テキパキと事を済ませなければならない。

地図とGPSデータから現在地の特定を終えると、小休止を切り上げ、舟を岸から押し出して乗り込み、流れへと入って行く。漕がずともパドルを浸けるだけで、リンクスは『ぐいっ』と引っ張り込まれ、そのまま一気に加速し、シーンジェックと一体化する。

極北の川旅はスリリングだ。

(三) クマ対策

最も気掛かりだったのは、やはり何と言ってもクマとの遭遇だった。既にアラスカで入手していたクマ対策パンフレット類や、「ベア・アタックス（クマはなぜ人を襲うか）Ⅰ・Ⅱ」（S.ヘレロ著、嶋田・大山訳、北海道大学図書刊行会二〇〇〇）を参照して対応策を検討したが、特に後者には生々しいクマによる事故の実態だけでなく生態学的観点からの情報も多く、大変参考になった。

これらの資料から分かったことは、まず基本的に本当に注意すべきはハイイログマ（グリズリー：平均体重三九〇キロ、時に五九〇キロ）。一方、アメリカ・クロクマは決して獰猛な動物ではないということ。また基本的なクマ対策タクティクスとしてはテント場・調理場・食料保管場所は各々最低でも各々一〇〇メートルは離すこと、食料は密封コンテナに収め、テント内では飲食はもちろんのこと食料持ち込みすら厳禁というものだ。更に、クマとの偶発的な遭遇を避けるため、ヒトの接近を事前に知らせる対策が重要とのことだった。

そこで、川岸への上陸に際しては音を立てて予告を心掛け、また岸辺などに残る足跡には十分注意した。

結果的には、幸か不幸かDrop-off当日、着陸直前に散歩しているグリズリーを見た以外は、古い足跡を一ケ所で見ただけで終わってしまった。新鮮な足跡を見つけた際には足型を取ってやろうと持参した石膏は、結局使わず仕舞い。

(四) 装備（*：現地購入）

軽量コンパクトに心掛ける、という基本方針は山と同じだが、船の場合は積み込んでしまえば後は船が運んでくれるため、余り厳密にこだわらなくても済むという点では気楽である。しかしだからと言って大荷物になってしまっては前後の移動が大変なだけでなく、船の容量や安定性にも差し障りが出るため、メリハリを付け、厳密に検討を加えた。

今回の荷物は、リンクス関連装備一式収納バッグ（八〇センチ×八〇センチ）、アタックザック（二六五リットル）、食料コンテナ（二〇リットル）の三個に納めた。

一般的な船の装備／艤装品については一般書（「カヌー&カヤック入門」山と渓谷社、等）に譲り、ここでは今回用いた数点の装備類についてだけメモする。

①船

ダッキーと呼ばれるジャンルのLYNX-1（AIRE社製・全長三・一メートル、重量一四・五キロ、積載可能重量一六〇キロ）。ラフティングで使う大型ラフトと同じ材質によって出来た二重皮膜の船体は丈夫で、岩にぶつかっても穴が開く心配は無用。セルフベイラー（自然排水）構造と断面積の大きさから極めて安定性の高い激流対応の船である。ただ、この断面積の大きさから風の影響を受けやすくスピードは余り出ない。一方その造りからして、エアポンプで三気室に空気を入れさえすれば、約一五分で組み立て完了。このリンクス本体、座席、PFD（ライフジャケット）、パドル（四分割）、エアポンプ、艤装品小物一式、修理具一式などを全て袋（八〇センチ×八〇センチ）に詰めキャリアーに載せて運搬。漕行中はこの袋にアタックザックや登山靴などを詰めて船尾にしっかり固定した。

②*地図

国際北極圏研究所（アラスカ大学フェアバンクス校）にあるマップオフィスで、多種多

様な地図を入手できる。今回はシーンジェック全行程をカバーする地形図を予め入手し、防水チャートケースに入るよう加工した。スケールは二種類（1/63,360 : 1 inch = 1 mile, 1/250,000）。しかし、地図は一九七二年撮影の航空写真を元に作成されているため、川筋の状況など経年的に変化し易い地形については、残念ながら余り当てにできない。

③ Google Earth 画像

地図情報の欠点を補完するため、ネット上に公開されている Google Earth の衛星写真を利用した（http://earth.google.com/）。アラスカの場合、アンカレッジなど都市部以外の写真精度は落ちるものの川下りに使うには十分で、グーグル画像により地図を事前に修正した。さらに漕行中は地図と対応するグーグル画像もチャートケースに入れていたが、現地で照合する程に、その情報量の正確さと豊富さを確認した。

ちなみに衛星写真は逐次精度の高いものへ差し換えが進み、シーンジェックの一部も既に分解能の高いものに更新され、トウヒの一本一本や波立つ早瀬の分布状況すら識別できる。

④ GPS

視点が川面に近い川旅では、山と異なり展望が効かない。したがって、特徴のある景色が周囲に見える場合や、流れが緩やかで川の地形を随時地図と照合しながら現在地を確認できる場合を除くと、位置確認に GPS が極めて有効だった。

つまり、GPS は現在地を単に緯度経度で表示するだけでなく、下ってきた軌跡が川筋そのものを現すため、軌跡を地図と照合させることで、位置をかなり正確におさえることが出来る。

⑤クマ対策用品

「ベア・アタックス」や各種パンフレット等の記載にしたがって、以下の用具を取り揃えた。

食料用密封コンテナ、ホイッスル三種、*シグナルホーン（音量一二二デシベル、約八〇〇メートル先にも音が届く船舶用警笛 FALCON 製）、*クマ撃退用トウガラシ・スプレー。

ちなみに、銃については、「ベア・アタックス」にしたがい携行しなかった。

⑥焚き火用具

流木を集めての焚き火は、炊事や暖をとるためにも欠かせない楽しみ。結果的には燃料節約にもなり、BORDE バーナーに使用したホワイトガソリンは一六日間で〇・七リットルのみ。また今回用意した*木製着火剤は、雨で流木が濡れていたり川風が強い時でも非常に優秀。*防水マッチも強力で、金網や携帯ノコギリ共々、実に重宝した。

ちなみに、9.11 以降は航空機への持ち込み禁止品リストが実に厳しく、ライターはもとよりマッチも駄目。バーナーや燃料ボトルについても、IATA（国際航空運送協会）指定業者による梱包によらなければ、未使用品以外は持ち込み禁止とのことであった。トラブルを避ける為に、問題が起きそうなものは事前に郵送した。航空便で、往復共に問題なし。

（五）食料

クマ対策食料用密封コンテナ（二〇リットル）が、持参できる食料の容量限界。計画当初は、単独行の長旅ということで、一六日間の食料計画は盛り沢山だった。そして食料も逐次購入していたのだが、いざコンテナにパッキングすると意外と入らず、最小限に搾らざるを得なかった。

結局、アルファ米一日一袋（副食は現地調達の魚だけ）、行動食カロリーメイト一日一箱、パスタ類・餅・ラーメン各少量、調味料一セット、ふりかけ、佃煮、スープ類、コーヒー等をギッシリ詰め込み、そのコンテナを特注の袋に納め、船首に固定した。

ところで、釣れなかったらオカズはなし、

貴重な食材 Arctic Grayling。いくらでも釣れるが、Grizzly を招いては大変なので、夕食に食べ切れる分だけを釣る。

という魚だが、アンカレッジのパブリックランズ・インフォメーションセンターで二週間分のライセンスを八〇ドルで取得して現地に向かった。

アラスカの川は、サケ科魚類のオンパレードと言っても良いほどで、キングサーモン、ベニザケ、ニジマス、ドリーバーデン、アークティック・チャー、アークティック・グレイリングを始め、これ以外にも色々生息しているのだが、これらの魚の中で、今回最も見たかったのはアークティック・グレイリング(*Thymallus arcticus arcticus*)だった。

この魚は、冬期に川が結氷して水中の溶存酸素が極めて低下し、他の魚が生息困難な環境下でも生息できるという適応能力を持った美しい魚。この低溶存酸素環境下でも生息できるという点では、ヒマラヤ・チベット地域の高所に適応分布し、私が新種記載したこともある裂腹魚亜科の魚と共通する特性を持っている。そうした背景もあって、是非見たかったのである。

この切望していたアークティック・グレイリングは、Drop-off 地点から一日下った氷床の残る上流域で、早速釣り上げることができた。釣り上げた喜びだけでなく、サケ科とはとても思えぬ大きな背鰭と、美しい鰭模様、そして上品な顔付きに、しばし見とれてしまった。

ただ釣りの対象としてグレイリングを見ると、つまらなく感じる人もいるだろう。それはアラスカの人々が所謂サーモン類を高く評価し、同じサケ科魚類であるにも拘らずグレイリングを雑魚扱いしていることとも関係していると思う。何故かと言えば、いとも簡単に釣れてしまうから。

今回釣り道具としてはルアーと毛針を用意していたが、増水による濁りのためルアーが使えず、結局透明な小河川との合流点付近で毛針を用いての釣りになったのだが、これでグレイリングには十分。そして、グレイリングしか釣れなかった。

釣り上げたグレイリングは、もちろん貴重な食材であり、「造り」「カルパッチョ」「煮付け」「塩焼き」「クリーム煮」等々、色々楽しんだ。中でも油の乗った「煮付け」は絶品で、身もさることながらスープの旨さといったら、一体どこからこのような旨味が出て来るのだろうか、と思わせるほどのものだった。

(十六) Pick-up

問題は Pick-up。その地点は、シーンジェック川とコニス川との合流点。そこへ二五日に Kirk が迎えに来るのだが、合流点はいくら何でも分かるにしても、滑走路の場所が特定できるかどうかが最も気掛かりだった。そこで、前もって合流点付近のグーグル画像を Kirk に送り、滑走路などの情報を書き込んで返送してもらっていた。これさえあれば安心である。

Pick-up 地点へは、増水による危険性を少しでも軽減するため、最後の三日行程を二日に短縮して、多少飛ばし気味にして向かった。

さて問題の Pick-up 地点が、いよいよ近づいてきた。相変わらず流れは早く、川面から目を離せない状況が続くため休憩の頻度を上げ、あと三回の左屈曲点を過ぎた先に目的地という所から最後の一本に漕ぎ出した。やがて一回二回と左屈曲点を過ぎ、いよいよ三回目の屈曲点が見えて来た。これを越えて右カーブに入ったところに船を着けて上陸すれば滑走路末端が見つかる筈だ…。

その時、「!!! 一体、何だ!!」それは左前方の水中から突き出て、青いテープをヒラヒラさせた一本の棒だった。尋常ではない。ここは、兎にも角にも船を止めなければならない。周囲の状況から、直ちに流れを思い切り突っ切り右岸から流れ込んでいる分流とのエディーに入り、先ずは船を岸に揚げた。

青いテープをヒラヒラさせた棒は、約五〇メートル先の左岸だ。ここは落ち着かなければならない。おもむろに、とっておきの飴を口に含み、ポカリスエットを飲む。

さて、何をさておき、現在地確認である。先ず GPS に緯度経度を表示させると…、何と秒単位でここが Pick-up ポイントであることを示しているではないか！　一体どういうことなのか？　半信半疑ながらも、今度は GPS に軌跡を表示させ、地図やグーグル画像と慎重に照合する。スケールを切り替えながら繰り返し照合する。

その結果、ここからコニス合流点は見えないものの、誤差約五〇メートルで、やはり対岸が Pick-up ポイントらしい。さてそうすると、今度は対岸に渡らなければならないが、この急流だ。そこで岸沿いに出来るだけ上流側へ船を引っ張り上げ、そこから左岸へと漕

ぎ渉ることにした。幸いな事に、流れは早いものの険悪な場所でなかったため一気に漕ぎ渉り、そのまま青テープ棒の立っている分流へと入り込んで舟を着け、一息ついた。

ただ、一応到着はしたものの、滑走路を捜し出さない内には、ゴールしたという実感にはまだ浸れない。不安と期待の入り交じった感じを抱きながら上陸すると、何のことはない。直ぐ砂地に数名分の足跡を発見。二週間振りに感じた人間の気配だ。足跡は中州の奥へと向かっている。これを辿れば滑走路に行き着くに違いない。辿るにつれ途中からはバギーの轍すら出て来た。飛行機から降ろした荷物を岸辺まで運んだのだろうか？　いずれにしても、その微かに残る足跡と轍を外さないように跡をつけていったのだが、草地に入ると慎重に辿っていたにもかかわらず見失ってしまった。

それでもあちこち歩き回っているうちに、茂みの中に半ば放置されたバギーは見つけたのだが、肝心の滑走路はいくら歩き回っても見つからないのである。潅木類が茂って見通しの効かない中を至る所で増水した水路が遮断しているため、GPSの表示精度を上げて、Kirkから送ってもらったグーグル画像を見ながら見落としのないように水路も渡ってジグザグに歩いてみるのだが、見つからない。

いくら小型のセスナとはいえ、飛行機が離発着する滑走路である。その滑走路が見つからないなどというワケがない。それにしても、何故遭遇しないのか…。本当にここがPick-upポイントなのか？　歩き回るほどに時間だけが過ぎて行く。日没（二二時三〇分）までにはまだ十分時間があるとはいえ、もう四時になった…。

確かに先ほど慎重にチェックし納得したのだが、蛇行回数からすると滑走路はひょっとして、やはり次の右カーブ地点ではないのか？　という疑心暗鬼に駆られる。しかしGPSの数値を信じるなら、そして対岸でやや分かりづらいのだが、それらしき所が目印のコニス合流点であるとすると、やはりここで滑走路はもとよりキャンプ地も探さなくてはならない。

しかし、水位はここに到着してからの間にも上昇し、その増水スピードの早さは、小さな中州に足の竦んだウサギを取り残してしまったほどだ。前夜のような六〇センチもの水位上昇を想定すると、安全にテントを張れそうな場所はどこにも見当たらない。そもそも、これまで安全な場所の指標にしていたビーバーやネズミなど小型哺乳類の巣穴が一つも見当たらないではないか。

仮に、ここがPick-up地点でないのなら、直ぐにでも船を出して下流側に安全なテント場を探すのが順当な判断であることは余りにも明白。ただ一度下ってしまうと、後で間違いに気付いてもこの場所に戻ってくることは、まず不可能だ。さあ、どうしたものか…。と、本当に困惑した。

これで天候が悪く雪でも降っていようものなら気が滅入るところだが、この日は珍しく朝から長閑な晴天に恵まれ、午後の爽やかでやわらかな日差しが何とも心地良い。それなりに結構深刻な状況である筈なのに、何故か、のほほんと構えている。

と、そのとき、かすかにエンジン音が。青空を見上げると、上流方向のかなり上空に一機のセスナが見えた。もはやここはセスナに尋ねることを躊躇している場合ではない。そこで、急ぎ船に戻り防水バッグからVHF無線機を引っぱり出して呼び掛けるも、一向に応答なし…。ダメか…と諦めかけたとき、そのセスナが徐々に高度を落としながら当方の回りを旋回し始めたではないか。

どうやら気付いてくれたらしい。そしてその機が正面上空を通過した際に機体番号を読み取ると、何とそれはKirkが操縦するセスナそのものだった!!　Pick-up予定日の三日も前であるにもかかわらず、一体何故どこから飛来したのか？　それは兎も角、何というラッキーな巡り合わせ。そこで再度VHFで話し掛けるのだが、やはり全く返答はなし。どうも何らかのトラブルで繋がらないらしい。よりによって、こんな肝心な時に…。

ただいずれにしてもKirkが低空で旋回し続けているということは、ここには滑走路がないということか？　では、やはりPick-up地点は別のところか？　そこで再び機が接近して来た時に、チャートケースを片手で持ち、『どこか分らない』というジェスチャーを送ってみた。

すると、しばらく大回りをしていたと思った機が、今度は前照灯を点け、超低空で真っすぐこちらに向けて突っ込んで来た。明らかに何らかの意志を示しているみたいだ、と

思った時、斜め頭上を通過した機体から物体が投下され、それはオレンジ色のテープをひらひらさせながらポトリと落ちてきた。急ぎ駆け寄って見るとそれはポリビンで、中には「Akira. Stay where you are. I will come back to check on you. It will face a few days for the water to go down. Good luck Kirk」のメモ。さらに、こちらが話しかけている内容は受信できているとのこと。そこで、今日の状況を説明した上で、アドバイスに従ってここに留まる旨伝えると、Kirk は翼を左右に振って飛び去って行った。

正直、もう一つ状況が把握できない所も残るのだが、少なくとも、この場所に留まる事が正解である事だけは確かになった。改めてメモを見ると、それは操縦席備え付けの地図の裏に書かれていた。それを何度も読みかえした。いずれにしても、これほどの安心感はないほど本当にホッとした。人とのコンタクトをこれほど有り難いと思ったことも、初めての経験だった。それも、二週間振りの人とのコンタクトが Kirk だったとは！

そろそろテントを張らなくてはいけない。問題の滑走路は、Kirk が何度もなぞるように飛んでいた下流側奥の方を明日捜すとして、先ずは「Stay where you are」であるから、テント場を一か八かで選定した。そして、流木を集めて焚き火を熾し、取り敢えずは到着を祝ってアルファ米の赤飯をセットした頃になると、何と僅かながらではあるものの水位が低下し始めていたのである。そして水位は、翌日以降も順調に下がり続けた。何の事はない、結局一番水位が高く、厳しい時に下ってきたという訳だ。

ところで、くだんの滑走路だが、あっけない程すぐ近くで発見できた。何とそれは船を左岸に着ける為に入り込んで息を継いだ分流そのものが、水が退いた時に滑走路であったと判明。もっとも滑走路と言っても、ただの河原である。そして、あの青テープを結んだ棒は、滑走路の端に立っていた。いくら「陸地」を歩き回っても滑走路が見つからなかった訳だ。

そしてその後、Pick-up までの中二日は、舟を分解して奇麗に洗って干したり、大水が滑走路に運んできた大きな石を退けたり、服の洗濯などの跡片付け。また抜けるような青空の元、それこそ日毎に進む紅葉に染まりながら果実酒用に木の実を摘んだりして、秋のシーンジェックを心行くまで、のんびり楽しんだ。

長年暖めてきたアラスカでの川下り、『川旅　シーンジェック』は、二〇年振りの増水という予想外の状況の元、エキサイティングでラッキー、そして印象深い川旅になった。天候は、途中で雪が降りしきる中を漕ぎ下る日もあるということで、決して毎日が晴天に恵まれはしなかったが、夏と冬とが同居し、初雪以降植物が日々一斉に紅（黄）葉し始めるという、一瞬の煌めきで秋が訪れる極北の大地を堪能した。

また数多くの、そして好奇心旺盛な野生動物達との出会いは、決して忘れることのできない至福の時だった。私の回りを、ふわりふわりと軽やかに舞いながら遊んでいたオコジョ、朝夕になると決まって対岸の木の上からこちらの様子を見ていたカモメ、テント前の三日月湖にゆったりと浮かぶシロエリオオハムやコハクチョウ、テントを張るなり見物に来たホッキョクジリス、余りに巣穴近くにテントを張ったことに文句を言っていたビーバー等々。出発前には、これほど多くの野生動物達と間近に出会える川旅になるとは予想だにしなかった。

水辺の足跡で一番多く、また目立つのがシカ科最大の Moose（アメリカヘラジカ）。川を下っている最中に、フと視線を感じて岸を見ると、3m もあろうかという個体が岸辺に佇んでこちらを見ていたりする。

ところで、極地にありながら、このように多様な生き物の生活が保証されてきた北極圏野生生物保護区（ANWR）であるが、ここにきて保護区域内の北極海沿岸部で発見された油田採掘が始まろうとしている。この地域は、ANWRからカナダにかけた一帯を大群で広く回遊するカリブーの出産エリアと重複しているため、その悪影響も懸念されている。

極地の生態系とは、その構造が単純であるが故に極めて脆弱である。つまり一つの関係性が途切れると、それをバックアップできない場合も多いが故に影響は思わぬところにも及ぶ可能性が高い。つまり、広大な地域を回遊するカリブーの再生産への影響は、懸念されている温暖化の影響に加えて、そのまま地域一帯の生態系に変化を及ぼしかねない。しかしながらこの開発計画に対しては既に法案が通り、後は様々な策略を弄しての予算案が通るかどうか、という段階まで進んでしまった。

本当に、せめて北極圏野生生物保護区ぐらいは、そこに住む動物達が安心して今後も生きて行ける場所であってほしいと、心からそう願う。

ところで帰国後、Kirkからのメールによると、ピックアップ日前からの晴天はその後も続き、絢爛たる紅葉のツンドラを流れる清流シーンジェックをセスナから見下ろすと、何と水中を遡るサーモンが見えるとのこと!!

一体それは、どんな光景なのか…、ため息の出るような空想の彼方で、いつか、また、あのツンドラの香しさに包まれる日の来ることを想いながら、ここに報告とします。

AACK人物抄
酒戸弥二郎さん（一九〇六～一九七六）

平井一正

この人物抄は、あまり人に知られていないAACKの物故会員を紹介するという目的で書き始めたものである。どういう人を取り上げるかは、筆者の独断によるが、ここに紹介する酒戸弥二郎（以下敬称略）は、偶然、細野、奥と続いて同じ世代の人物になってしまった。たまたま執筆中の別の人の調査が行き詰まっていたこともあり、また酒戸をぜひ紹介せよと一部会員から強い要望もあり、比較的資料も豊富に集まったので、ここに紹介する次第である。

一、プロフィル

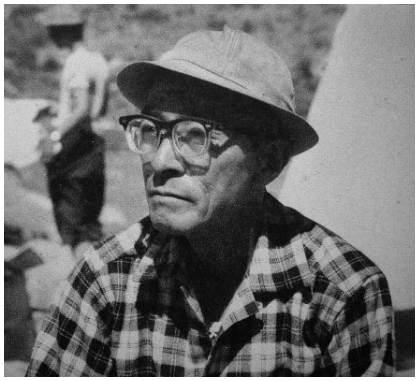
酒戸弥二郎、愛称ヤジさんは今西錦司らと開拓期の日本の山を多く登っている。AACK創設以来の大先輩であり、国内の山の初登攀の記録も多く、海外の山ではノシャック遠征隊長として活躍した。

酒戸は一九〇六年大阪で生まれ、天王寺中学を経て、三高に入学、山岳部員として活躍（陸上部の選手でもあった）。今西錦司や西堀栄三郎らは二年上、先に紹介した細野重雄や奥貞雄と同期である。京都帝国大学に進み、一九三〇年京大農学部農芸化学科卒業、同年、京都府宇治茶業試験所に入所、一九四七年同所第一〇代目所長、一九五八年静岡大学教授、一九六九年定年退官、引き続き静岡英和短期大学教授をつとめ、一九七一年同大学を退職したあと、しばらくは静岡にいたが、その後、一九七四年から亡くなるまで京都で暮らした。

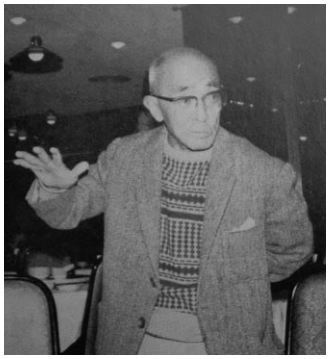
二、登山家酒戸

酒戸が三高時代に行った山行きの中で画期的なものは、今西錦司や西堀栄三郎らと行った一九二六年春の東沢である。その記念写真で、中央で一番小さいのが酒戸である。同年、今西がリーダーで奥又白から前穂高北尾根に登ったが、これは初トレースであった。（その帰途、涸沢へのグリセードで井上が遭難死亡した。）一九二八年には新高山（玉山）はじめ台湾の山々を登っている。

一九二九年に高橋健治をリーダーとして酒戸、奥、細野らがはじめて、北岳バットレスを開拓した。京大に進学した後も、我が国ではじめての極地法で冬の富士山に登っている。



なぜか一九三四年の白頭山遠征には参加していない。ただAACKの創設に関与しているので、ヒマラヤへの夢はもって



歌」を作ったときに酒戸も参画していたことを付加しておく（ＡＡＣＫホームページ）。

いた。ちなみにＡＡＣＫ創設時には会計係りであった。

なお一九二六年一月西堀らが新鹿沢温泉で「雪山賛

三、遭難救助のヤジさん

上述の一九二六年、奥又白から前穂高北尾根へ登った帰途、四、五のコルから、涸沢へのグリセードで下りたとき、井上金三がクレバスに転落死亡、今西も意識不明、上林明も大怪我という遭難事件を引き起こした。このとき、酒戸はひとり現場から上高地まで走り、人夫をつれて再び現場に戻った。不眠不休の一〇時間であった。（現場 4:20pm ―五千尺 6:50 ～ 8:00 ―現場 2:00am）、また滋賀の横山岳で雪崩にあい奥貞雄が九死に一生を得たときも、酒戸は救助に奔走した。さらに一九三一年冬今西、西堀らによる富士山大沢口からの極地法による登山のとき、下山の途中で工楽英司が頂上近くから滑落した。幸いなことに一〇〇〇ｍほど落ちて止まった。同行していた浅井東一は、気絶している工楽を見て、これはもうアカンアカンといい、酒戸に大宮へ薬を取りに行けと言った。午後六時、あたりはすでに暗く、薬をもって上がってきたのは朝七時であった。不眠で走った必死の一三時間であった。幸い工楽は腕を折っただけで助かった。

三高、京大の遭難事件では、酒戸はいずれもそのパーティの一員であり、救助に尽力した。「わしは今西、上林、奥、工楽の命の恩人や」と私に語ったことがある。遭難救助のヤジさんといわれる由縁である。

四、茶業研究所

酒戸は大学卒業後、宇治の茶業研究所に勤めた。その頃のことを後輩の深海浩さん（京大名誉教授）が語る。以下『　』は深海さんによる。

『私がヤジさんを知った頃は、すでに京都の茶業研究所の所長であった。お住まいは京大の北部、北白川の一郭にあり、農学部のすぐ近所でもあったので、通勤途上、毎朝といっていいほど頻繁にわれわれの研究室に立ち寄って、若者を相手に「清談」を一席ぶっていかれるのである。宇治に着くのは多分昼飯時であろうというほど、悠々たるものであった。生来怠け者の私は、長じては宇治茶業研究所で暮らしたいとあこがれたものである。

ある日、ヤジさんの清談にあこがれた数人が、一度腰を落ち着けて一日じっくりとヤジさんを囲もうということになり、八瀬のとあるお寺の本堂をかりて「清談会」をもった。ヤジさんの語り口は決して雄弁という類ではなく、どちらかといえば訥々として口ごもりながら、ぼそぼそとしゃべり、往々にしてエッヘッヘと照れ笑い的な語尾で終わる。鼻の下を右手の薬指と中指の二本でさする仕草が癖であった。清談といっても「豊織時代、竹中半兵衛と黒田勘兵衛もし闘えば、いずれが勝つか」などのとりとめのない話から、京大創設期における内藤湖南招聘の顛末やその後の「支那学」の展開などというおそろしく高尚なものまで、幅の広がりはたいへんなものであった。ヤジさんの常套語のひとつは「博覧強記」であり、内藤湖南や吉川幸次郎を例にあげての話が多かった。』

酒戸は一九三三年結婚、北白川に住む。二女をもうけた。ついでながら、頭髪はうすかったが、手足は蚊も刺せないほどの毛むくじゃらであったという。

五、お茶の旨みの研究

『ヤジさんは農林化学科の武居三吉研究室に第四期生として入門した。武居研は茶などの香気成分を研究課題にとりあげていた。ヤジさんは茶葉の化学をやれば、いつかはヒマラヤ山麓のお茶の産地ダージリンやアッサムに行く機会が訪れるものとの淡い希望を抱いて専攻分野をきめたとある。

玉露の風味を探るのがヤジさんの一生の課題であった。戦後間もなく玉露のうまみの本体をつかんで、テアニンと名付けた。グルタミン酸の変わり種である。戦後のあの物資不足の時代に、このようなあざやかな仕事をよく成就したものといまでも感心せざるを得ない。』

戦後来日したソ連の科学者オパーリンは酒戸の業績をみて目を見張ったという。

酒戸はテアニンの結果をまとめて京大から

博士号をとった。このときの論文はわずか三ページであった。これでは少なすぎる、もっとふやせという審査委員の要望で一三ページにしたという逸話がある。京大の博士論文の中で最もページ数のすくないものであるということは伝説になっている。当時の教授会では激論が闘わされ、相当物議をかもして難産だったという。因みに農学部の教授会で玉露を全員にふるまったという話がある。

一九六七年、茶の化学的研究の功により日本農学賞を受賞している。

六、静岡大学へ

深海さんは語る。『昭和二〇年代の終わり頃、ヤジさんは静岡大学農学部の教授に招かれる。当時、研究室は浜松と掛川のちょうど真ん中あたりの田舎まち、磐田の旧陸軍兵舎を利用した粗末な大学の中にあった。やはり寂しいのか、「ウナギを食わすから来い」とたびたび誘いがかかる。数回遊びに行ってますます円熟味を加えた清談を拝聴したものである。

その頃から紅茶の香の研究に精を出しておられた。何トンという紅茶、もちろん屑茶であったとはいえ、経費もさることながら、その量をこなすのは並大抵なものではない。伊那和夫さん（後日静岡大学教授）が助手で、一手に引き受けてその難行をこなしていた。努力の甲斐あって、これが紅茶の香の主役を演じる物質がというものを掴んだ。（中略）昭和四〇年のはじめの頃であった。後に明らかになったことだが、同じものが牧草のサイロから滲み出している汁液にも含まれている。何トンからわずか数百ミリグラムがとれたという貴重品である。当時ようやく研究室に入った「核磁気共鳴スペクトル」を活用して、幸運にも結論に達し、テアスピロンと名付けた。紅茶香気研究史上に輝く金字塔のひとつである。』

七、静岡大学山岳会の生みの親

酒戸が赴任した静岡大学は、まだ蛸足キャンパスの問題を抱えていた。山岳部は、旧制静岡高校山岳部の流れをくむものであったが、新制大学発足に伴い、各学部が地理的に離ればなれになっていて、山岳部もそれぞれ独自に活動していた状態がしばらく続いていた。酒戸は山岳部の統合を熱心に働きかけ、その尽力によって、一九六四年一〇月に静岡大学山岳会（Academic Alpine Club of Shizuoka）が創設された。そしてその初代会長になっている。

海外遠征経験者である酒戸の助言と援助で以後のＡＡＣＳの活躍はめざましいものがある。一九六七年のコロンビア・アンデス、一九七〇年のチューレン・ヒマール、一九七五年のテラム・カンリ、一九八七年の皇冠峰、一九九七年のグルグルムズターグなど、数多くの初登頂を記録している。その生みの親の酒戸の貢献は大きく、多くの優秀な登山家を育てた。

酒戸は小柄で、きさくな人柄は親しみやすく、考えは柔軟で偉ぶらず、静岡大、京大などでは山の仲間に世代をこえて人気があった。酒戸のおかげで静岡大学山岳会の人たちとＡＡＣＫの会員の間で交流が芽生え、多くの知人、友人を得ている。

八、ノシャック峰初登頂

一九六〇年ＡＡＣＫがパミール高原学術登山隊を派遣することになったとき、今西や桑原武夫の要請をうけて隊長として出馬する。それまで京都の若手は酒戸のことは個人的にあまり知らなかった。しかし気さくな人柄の酒戸はすぐ若手隊員にとけこみ、両者の間に年代の差は感じられなかった。そして見事にノシャック（七四九〇ｍ）の初登頂を導いた。五四歳のときであった（ちなみにチョゴリザの桑原隊長も五四歳であった）。

ノシャック峰の成功は、隊長酒戸の外交、募金、渉外の才能によるところが大きい。当時、ワハン渓谷への進入には、許可を取るのが至難であり、各国の旅行者が断られていた。カブールでは、酒戸に対するその許可がでるかどうか注視されていた。酒戸は一計を案じ、大使館主催の登山隊の壮行会を催してもらい、そこにアフガン政府のお偉方に招待状を送った。アフガンの役人たちは欠席すれば外交上非礼になり、参加すれば登山を認めたことになる。多くの役人が出席し、結局政府は登山を認めた。これは酒戸の外交手腕によるものと、今西や桑原は絶賛した。

このほか突然現れたポーランド隊との合同登山の提案や、登頂後問題になった国境侵犯の問題などに酒戸の卓抜した問題解決の能力が見られる。

九、再びアフガニスタンに

一九六八年、酒戸は栄養学者の芦田淳（後の名古屋大学学長）をかつぎだして、名大、東大、静岡大などの研究者からなる栄養学調査隊を組織し、ふたたびアフガニスタンに行った。アフガニスタンの山地住民は日常青色野菜などはまったく口にせず、小麦粉を焼き上げた薄っぺらなパンだけで過ごし、ビタミンCの供給源など見あたらないにもかかわらず、壊血病になる人は皆無。之は一体どうなっとるのか？　栄養学的には粗食であるにもかかわらず栄養的に優秀であるという疑問を解決するというのが、ひとつの目的であった。

酒戸は当初の予定でカブールから引き返したが、調査は継続した。ちなみにこのとき会員酒井敏明（当時東海大学講師）も隊員として参加していたが、チャーターしたジープの事故でもう一人の隊員とともに負傷し、二人とも急遽帰国する結果になった。その後遺症は今も彼を悩ませている。

『ヤジさんの学術研究は余技にすぎなかったのではないかと私は睨んでいる。眉間にしわをよせて沈思黙考する型の真摯な学究肌ではなかった。常に自分の土俵で自分の相撲を取る人だったと思う。ヒマラヤに行きたいから茶をとりあげたという伝説は伝説ではなく、実際にヤジさんはそう考えたのではないだろうか。事実ヤジさんは清談の中で度々、現地に出向いて調査したいと漏らしていた。これもヒマラヤ願望の現れの一つだろう。ヒマラヤが先か、ビタミンC給源の謎究明、あるいは茶の旨み究明が先なのか、ここらあたりが凡人には解きえない境地なのであろう。ヤジさんの頭の中では両者渾然一体となってどちらもが先であったのだろう。』と深海さんは記す。

一〇、酒戸の清談

酒戸は文字通り博覧強記であり、その言はおもしろく、人をひきつける。「話し出したら一時間、さらに口に唾がたまって一時間、アワを吹き出したらさあたいへん…」と研究室の人が言っていたらしい。文章も軽妙洒脱で「ノシャックの思い出」（紫岳、静岡大学山岳部編、ヒンズークシ会議会報）や「ノシャック」の報告文は読む人を抱腹絶倒させる。幸い私は酒戸からの手紙を大部分保存している。すべてを紹介できないが、二、三紹介しよう。

●返事がおそい

酒戸は一九六〇年代のはじめ、後輩にハッパをかけようと「アンマからゴローまでの会―AG会」を企画立案したことがある。（アンマは山口のあだ名）。そのときの話。

「AG会は小生会長となり、オシメに事務局長をやってもらう。この旨オシメに手紙だしたがまだ返事ない、彼は手紙おそくて困る」そして延々と会の企画を書いた後「そうしてみると鈴木梅太郎は偉いね。私の手紙はすべて鈴木先生に教えられたのだ。私がまだ若い頃、二七～二八歳の頃と思う、人に頼まれて先生に抹茶（当時一〇匁八〇銭）を送った。そうすると送り状（はがき）が先に着き、着くや否や先生は返事をかくのである。「抹茶を送っていただいた由、有名な宇治の銘茶が早く着かんかと鶴首して待っている」と。そして抹茶が着くや否や「今抹茶が着いた。すぐよばれたがさすが宇治の銘茶である」と。私もずいぶん多くの人に抹茶を送ったが、抹茶一〇匁で二回礼状をもらったのは、鈴木先生おひとりだ。これだけ返事が早いと茶を飲んで旨いという語気がハガキの上を伝って来るように感じた。私はこれを見て感銘した。世の中には偉い人がいるものだと。私はいま物をもらったら即刻礼状を出す。あとで食べてからまたゆっくり礼状を書くことにしている。礼状は早い方がよい。時間がたってからもらう礼状は気の抜けたビールの如くでさっぱり有り難くない物だ。」（昭和四九年一〇月私信）（鈴木梅太郎は静岡県出身で、東大農学部農芸化学科教授を勤めたビタミン研究の先駆者（一八七四～一九四三）

●京都人と静岡人

（京都人が募金に協力してくれなかったと不満を述べた後で）これだけせわになっておれば他府県の人ならおそらく奔走するだろう。九州北部の人なら、よし金のことはまかしとけと、胸をたたくであろう。（中略）私の先生近藤金助は定年のとき、「京の底冷えにも似た京都人の冷酷非情な」と申した。骨身にしみ込んでいるような底冷えの中にいれば人の心も冷たくなるのであろうか。これに反して、静岡の人情は暖かい。私のアパート見回りの巡査が、先生山からのお帰りに私の派出所へお立ち寄り下さい、茶など出しま

しょうという。またある土曜日の晩、駅から電話あり、今カニがついた（林一彦から）。今日は土曜日の晩で配達できない、翌日は日曜で配達できない、腐ったらたいへんだから、取りに来てくれ、と。京都駅員が電話などかけてくるだろうか。静岡の人は道を聞くとついてきて判るところまできてくれる。

欠点は静岡ぼけだ。三好達治のいうのに、静岡人の詩が一番下手だと思う。詩や歌などは暑い、寒い、貧乏など、神経を刺激するものがないとできんので、飽食暖夜ではできんということだろう。（同上）（三好達治は三高で酒戸の五年ほど先輩）

●マムシの酒戸

静岡大学農学部ではよく知られたあだ名である。「鬼の金兵マムシの酒戸」といえば強い者の代名詞となっている。事の起こりは静大農学部で、あるとき雑談していたとき、私がかってマムシ酒をのんだが、あんなものは少しもきかんと申した。それはずっと以前、私の家の女中に蛇屋の娘がいて、これをおのみになればいつの間にやらご飯がおいしくなりますと言って、真正マムシ酒をもってきた。一升一〇円もするので、私がチョコに毎日一杯づつ飲んで、効くか効くかと思いつつ、ついに一升飲んでしまった。それを申したのだ。すると横にいた教授が、貴方はマムシより強いではないか、マムシがあんたを食って強くなる位のものだと申した。（同上八月）

●荷物を担がない山登りなんて

雑誌ケルンに酒戸が台湾山岳の紹介をしている中の一文。

「荷物は駐在所の小使いがもってくれるから空身であるけばよい。一度でいいから空身で山を登ってみたいと思うことがよくあるが、さて空身で歩いてみると、あまり有り難いものではない。南湖大山を登ったときには荷物を持ちたくて仕方なかった。…ある人がソクラテスに尋ねた、「師よ、教え給え、我結婚すべきや否や」、ソクラテスは答えた。「いずれすとも汝後悔すならん」満足しないのが人間の本姓であるならば、またやむを得ないのか。」（酒戸：台湾山岳雑感、ケルン、四、一九三四、pp 33-36）

話はまだまだ尽きないが、紙数の関係で割愛する。

一一、その他

退職直前脳梗塞をわずらい、医者に手紙を書くことは脳の活性化にいいということをきかされた結果、便せん三〇枚以上にもおよぶ長文の手紙をいろいろな人に送りつけるようになった。相手は岩坪五郎であり、山本良三であったが、そのうちに私あてにも来るようになった。手紙の礼状を出したらすぐまた長文の手紙がくる。いささかうんざりしたものである。岩坪には〝いづう〟の鯖寿司とハモの照り焼きが食べたいと書いてきたので、彼は酒井と相談しそれを静岡に届けた。「オシメとゴロウはこのような素敵な物を京都からもってきた。おまえも欲しいだろう。ひがめ、ひがめ」とヤジさんは、西堀らに書きまくり、ふたりは往生したという。

五郎から、酒戸が寂しがっている、誰か京都から見舞いに行け、ということになって、中島道郎と私平井が静岡を訪ねたことがある。丸子のとろろ汁、イチゴ狩り、イタリア料理などが記憶にある。

数々の話題を残して、愛すべき先輩酒戸ヤジさんは、一九七六年一〇月、心筋梗塞のため、新河端病院の斎藤惇生にみとられ亡くなった。

本稿をまとめるにあたり、静岡大学名誉教授大石惇先生、京大名誉教授深海浩先生、JAC静岡支部の長田義則氏など多くの人に資料の提供を受けた。左右田健次会員には深海先生を紹介してもらい、数々のご助言を受けた。酒井敏明会員には文献を教えていただいた。また今西武奈太郎さんからはコメントをいただいた。長女の近藤牧子さんにはいろいろとご教示を受けた（因みに二女の蕗子さんも健在で下鴨におられる）。以上の各位に感謝申し上げる。

山崎編：日本登山記録大成　二、一五、一八巻、同朋舎
岩坪：追悼酒戸弥二郎、山岳、一九七六～七七年、pp. 177-179
名古屋大学：北部アフガニスタン栄養調査行、「化学と生物」、七巻四号、昭和四四年四月

コメント：よく質問されることであるが、高橋健治さんの人物抄は、本ニュースレターの一号から七号まで斎藤清明が執筆している。以後途絶えていたが、三三号から復活した（平井）。

ビアフォー氷河・ヒスパー氷河トレッキング

（二〇〇六年六月二四日～七月二四日）

阪本公一

今年六月二四日～七月二四日の約一ヶ月、パキスタン・カラコルムのトレッキングに行ってきた。

行き先は、世界で四番目に長いといわれるビアフォー氷河からスノーレイクにいたり、ヒスパー・パス五一五一mを越えて、世界で五番目に長いヒスパー氷河をおりて、フンザまで歩くという、約一二〇km強の氷河の山旅。

メンバーは、高野昭吾さん（一九五四年入部、七二歳）、堀内潭さん（一九六〇年入部、六六歳）、岡部光彦さん（元京都山岳会、六四歳）と私（一九六〇年入部、六六歳）の四名。

この二つの氷河は、一八九二年にイギリス人のマーテイン・コンウエイにより初めて探査された。その後、今西錦司さんや中尾佐助さん達が一九五五年に日本人として初めて踏査された（世界では五番目）、カラコルムでは由緒ある氷河ルートである。

若い時に、今西錦司さんの「カラコルム」、そしてコンウエイの「カラコルムの夜明け（吉沢一郎訳）」を読んで胸を躍らせ、一度は歩いて見たいと憧れていた二大氷河である。

二〇〇〇年八月にラカポシで亡くなった岳友須藤建志君が「阪本さん、機会をみて一緒にスノーレイクを見に行きましょう。」と言っていたこの二大氷河を、彼の七回忌追悼を兼ねて歩いてきた。

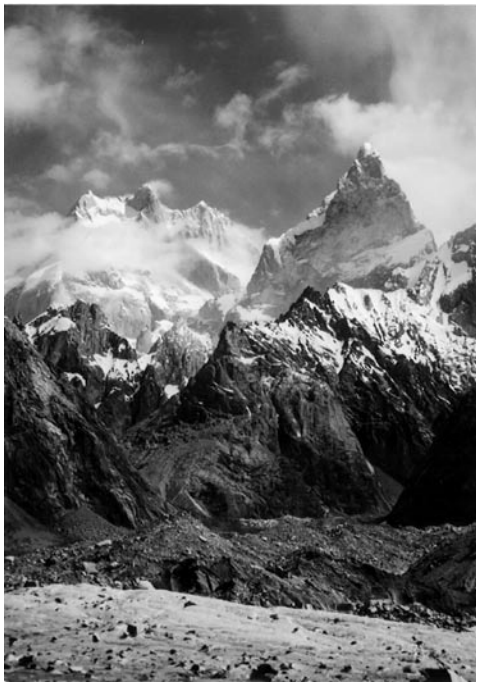
トレッキングの出発地であるアスコーレを六月三〇日出発。ビアフォー氷河は非常に美しい氷河である。マンゴを過ぎると、泥や瓦礫で汚れたモレーンは、氷河の両脇に押しのけられて、ビアフォー氷河の中央部は純白の美しい氷河となって、スノーレイクまでつづく。通常はアスコーレから五泊六日で標高約四七五〇mのスノーレイクに行く氷河コースであるが、私たちは年寄り隊なので、高度順応を兼ねてバインタで三泊して（一日はバインタ・ルクパール氷河を登りラトック山群の観察、もう一日は完全休養）七泊八日でスノーレイクまで行った。そのお陰か、隊員は誰も高度障害に悩まされることはなかった。

ビアフォー氷河は、幅の広いところでは三～四kmはあろうか？　遠くから眺めると、まるで車で走れそうな舗装道路のように見えるが、歩いてみると無数のクレバスが走っており、氷河の表面には昼中は清い水が勢いよく流れている。

ガイドのサディックに言わせると、バルトロ氷河や他のカラコルムの氷河はどれもこれもモレーンで汚れており、ビアフォー氷河のような純白の氷河は他にあまり見られないとのこと。

ビアフォー氷河の両岸には、数多くの六〇〇〇m台の未踏の無名峰が連なって聳えている。バインタを越えると、左岸にかの有名なラトック一峰七一四五m（一九七五年に原眞隊長のＪＡＣ東海支部隊が試登後、一九七九年に高田直樹隊長の京都カラコルム隊が初登頂）、その左にラトック二峰七一〇八m（一九七七年イタリア隊初登頂）、その右にラトック三峰六九四九m（一九七八年に原眞隊長の東海支部隊が試登。翌年一九七九年に故高見和成さん達の広島山の会が初登頂）、更に右奥に四峰六四五五m（一九八一に年大宮求隊長の山岳同志会が初登頂）等、日本と縁の深いラトック山群の恐ろしく厳しい鋭峰が並ぶ。

その北には、スノーレイクの盟主バインタ・ブラック七二八五m（別名オーガ）が聳える。



翼を広げたようなバインタ・ブラック7,285 mと手前の無名峰。

一九七七年にイギリス人のクリス・ボニントンとダグ・スコット達が初登頂したが、登頂後頂上直下の振り子トラバースで両くるぶしを骨折したダグ・スコットを救出するため七日間の決死の下降をした話は、今も語りぐさとして伝えられている。

スノーレイクの手前のカルホゴロからは、通常雪が非常に深く、クレバスも多くて、どの隊もラッセルで苦労すると言われている。カルホゴロからスノーレイク、スノーレイクからヒスパー・パスを越えてヒスパー氷河側のカニバサまでの二日間が、このトレッキングの勝負どころ。

昔、ラトック一峰を試登後ヒスパー・パスに登られた原眞氏も湿雪の深いラッセルに苦労されたらしく、私たちの出発数週間前に「スノーシューか、スキーを持っていった方がよいのでは…」とのアドバイスをいただいた。検討結果、隊荷も重くなるので、この二日間は早朝出発又は深夜出発の方法で対処する方針で出発した。

マルホゴロからカルホゴロを飛ばして直接一日でスノーレイクに行く隊も多いようだが、私たちは老人部隊なので、無理をせずカルホゴロからスノーレイクまで半日行程の計画とし、マルホゴロからスノーレイク間を二日かけてゆっくりと歩く行程計画とした。

天候の先行きが何ともわからないので、ガイドのサデイックは、思い切ってカルホゴロから一気にヒスパー峠に登り、この際スノーレイクにもヒスパー・パスにも滞在せずにカニバサまで一日で行ってはどうかとのアイデイアをだしてきた。

体力のある若い隊であれば彼の案も実現可能だろうが、私たち年寄りの体力ではカニバサまでの長路は余りにも厳しく、且つ午後になって腐った深雪となるヒスパー氷河の下山は好ましくないので、天候のことは運を天に任せ、当初予定通りスノーレイクで充分休養をとった後、深夜にヒスパー峠越えをすることにした。

バインタ出発以来、連日の快晴続きの好天に恵まれ、ラッセルも殆どなく、カルホゴロから約四時間で、七月七日待望のスノーレイクに午前九時四五分についた。

スノーレイクは甲子園の何百倍と思われる広大な大雪原で、六〇〇〇～七〇〇〇ｍの山々に囲まれた白銀の盆地。まさにメルヘンの世界。余りにも素晴らしい風景に陶然となる。

スノーレイクからヒスパー・パス五一五一ｍへは、斜度二〇～三〇度ぐらいの割と緩い傾斜の三～四段になった雪の斜面。昔、今西錦司さんがテレマークで峠から滑っておりたという。スノーレイクにテント設営後、一〇時四五分に出発して、ガイドと隊員二名で、運動靴のポーターの為に、その日のうちに五〇〇〇ｍまでトレースをつけた。雪はしっかりしまっており、キックステップで靴が少し沈む程度の最高の状態。標高五〇〇〇ｍまでの傾斜のきつい核心部までトレースをつけることが出来、明日の峠越えの見通しがほぼついて、午後二時にテント地に帰着した。

翌日七月八日、早朝の午前三時にスノーレイクのテント地を出発。昨日のトレースをたどって、しまった雪面を楽に登り、朝六時にヒスパー・パスに着いた。峠の手前で見た、朝焼けのバインタ・ブラックは実に印象的であった。

ヒスパー・パスからヒスパー氷河におりると、傾斜が一〇～一五度位のダラダラした長い長い下りの雪面がつづく。時々ヒドン・クレバスがあり、隊員一名とポーター一名が胸のあたりまで落ち込んだが、アンザイレンして行動していたので事なきを得た。快晴の強い太陽はあつく、かなり消耗して、次の泊ま

ヒスパー峠の手前より眺める早朝のスノーレイク。朝焼けに輝きだしたバインタ・ブラック 7,285 m。その手前の氷河は、シムガン氷河。

り場のカニバサに着いた。
ヒスパー氷河はカニバサまでは純白の氷河だが、カニバサ氷河が合流する近辺から下流は、泥と瓦礫で汚れたクレバスだらけの幅広い氷河となって延々とつづく。カニバサから五日かけて（一日は休養）、七月一三日にヒスパー村へ到着。ヒスパー村の少し上流でヒスパー氷河は舌端となっており、そこからはヒスパー川の濁流となる。
ヒスパー氷河の右岸には、七〇〇〇m台の魅力的な高峰がつづく。
一九八一年に千葉工業大学の坂井広志さん達が第二登されたカンジュート・サール七七六〇mがカニバサ氷河の奥に聳える。
ユトマル氷河の出合いからは、一九七九年に北海道山岳連盟隊が初登頂したプマリ・チッシュ七四九二mの秀峰が望まれた。
ビタンマルでクンヤン・チッシュ七八五二mに五回目の挑戦をしておられる飛田和夫隊長の率いる同人バハール隊BCを訪問した。雪の状態が悪くて、今年も登頂出来なかった由。
クンヤン氷河を渡りきった少し下流から、クンヤン・チッシュ主峰七八五二m、南峰七六二〇m、西峰七三五〇mの人を寄せ付けないような厳しい山容が前山の向こうに頭を覗かせていた。
ヒスパー氷河の左岸にはヒマラヤ襞をつけた六〇〇〇m台の未踏の無名峰の連山が、ヒスパー・パスから延々とつづいている。近い将来、これらの魅力的な山々も登頂される日が来るのであろうか？

一八日間の予定でアスコーレを出発したが、好天に恵まれ、予備日二日を残し（合計一六日間）、七月一四日にフンザに到着し、私たちの氷河の旅は無事終わった。過去五度このコースを歩いているガイドのサディックも、今回のように連続七日間の快晴に恵まれたのは初めてという。全くラッセルのない、ヒスパー・パス越えも彼の経験では極めて珍しいとのこと。

フンザ・カリマバードからは、ミック・ファウラーとヴィクター・ソンダーズが初登攀したスパンティーク七〇二七mのゴールデン・ピラーが左に望まれ、正面には北杜夫の「白きたおやかな峰」で有名になったデイラン七二六六m、そして一番右にはどっしりとしたフンザの名峰ラカポシ七七八八mが、ホテルのベランダから眺められた。
余った予備日を使い、一日はウルタル二峰七三八八mのBCへハイキング。難攻不落だったウルタル二峰は、一九九五年山崎彰人さんと松岡清司さんの二人により、アルパイン・スタイルで初登頂された。初登頂後に何日も飲まず喰わずで必死の下山をしてきた二人のうち、山崎彰人さんがBC直前で疲労衰弱死された。岐阜大学で同期だった鈴木幹夫さんの依頼を受けて、ウルタル二峰BCの茶店「レディース・フィンガー・レストラン」前の大岩に立てかけてある山崎彰人さんのレリーフにお参りをし、般若心経を唱えて法要を行った。
BCからは、フンザ・ピーク六二七〇mの下に聳える針のように尖った岩塔レディース・フィンガーが望まれる。山崎彰人さんのレリーフを持って翌年追悼にきたパートナーの松岡清司さんが、山崎夫人達と別れた後一人でレディース・フィンガーを登りに出かけ、岩雪崩で不幸にも亡くなられたらしい。何か、人間の運命のはかなさを感じさせられる。
フンザ到着後、ずっと曇り空でラカポシは姿をあらわさなかったが、フンザを明日出発して帰国すると言う最後の日に、幸運にも快晴になった。ラカポシは、フンザ川から標高

ヤルよりグルミット氷河の奥に眺められるラカポシ7,788 m。ちょうど大雪崩が発生した瞬間。

差約五五〇〇mの上の紺碧の空に突き刺すように聳える。神々しい名峰ラカポシを仰ぎ、般若心経を唱えて故須藤建志君の七回忌追悼を行った。

年寄りにはいささか厳しいコースではあったが、全員の体調もよく、珍しい程の好天にも恵まれ、予定通り氷河の山旅を無事終えることができた。ラカポシで眠る岳友須藤建志君が、きっと我々の安全を見守ってくれていたのであろう。

トレッキング中、他の隊にも全く出会わなかった。アスコーレから出発したオランダ隊は悪天の為スノーレイクにも到達出来ず引き返してきたらしく、又フンザから出発したアメリカ隊はカニバサでポーターのストライキのためにヒスパー・パス越えを断念して撤退したという。我々の隊が、どうも今年ヒスパー・パスを越えた最初のトレッキング隊だったようだ。

珍しい程の連日の快晴に恵まれたので、ビアフォー氷河、ヒスパー氷河を取り巻く数多くの秀峰を眺めることができたのは、本当にラッキーであった。

毎日笑いの絶えない和気藹々の雰囲気の中で、最高に楽しい氷河の山旅を満喫することが出来た。

以上

アフリカ縦断の旅　第三部

田中二郎

チンパンジーの森、マハレ国立公園

明けて一〇月一〇日、モロゴロからアルーシャまでの六三〇キロをひた走りに飛ばし、予定通りマハレ国立公園へ行く一一日のチャーター便に無事間に合わせることができた。アルーシャの手前のモシの町からは、晴れていればキリマンジャロが真正面に見えるはずなのだが、あいにくの曇り空で、なだらかな裾野の部分がぼんやりと見えるだけであった。チャーター機が出発する前の朝一番に、車をトヨタのディーラーに持っていって、オイル交換をはじめ各部の総点検を依頼した。点検整備はナミビアのスワコップムント以来で、途中カラハリのニューカデでは、藤岡君と二人でオイル交換だけは行っていた。

われわれ八人と操縦士で満杯となった軽飛行機は、一直線にタンガニイカ湖を目指し、ノンストップでたっぷり三時間かかって浜辺につくられた滑走路にスムーズに着陸した。操縦士が無線でマハレのキャンプに連絡をとり、迎えの船がまもなくやってくるというので、待ち時間の合間にホテルで用意してもらったランチボックスを開いて昼食とする。一時間以上は待たされたであろう。ようやく迎えの船が到着する。京大隊が使っているカシハの浜から一キロほど南へいったシンシバの浜にある私設のンクングウェ・テンテッド・ロッジに無事に到着した。ヒコーキ便の関係で、私たちはここに四泊し、チンパンジーを追って山を巡り、釣竿を片手に湖に遊んだ。

伊谷純一郎さんの指導の下、西田利貞さんがここでチンパンジーの餌付けに成功したのは一九六六年のことであった。以来四〇年、多数の若い人たちがこの森に分け入り、チンパンジーの生態、社会、行動、群れ間の関係をつぶさに観察し、多くの新発見をもたらしてきた。いまちょうど西田さんが、若手研究者の中村美知夫君、伊藤詞子さんなどとともに調査に入っていた。私たちは、翌一二日、朝食を済ませるとすぐ山に向かって出発した。遠くに鳴き声が聞こえたので、だいたいの位置は分かると言う。二〇分ほどだらだら

タンガニイカ湖の浜辺に作られた滑走路からカソゲ基地近くのンクングウェ・キャンプまで船外機付のボートで小１時間。（撮影：藤岡悠一郎）

ンクングウェの浜に作られたテンテッド・ロッジ。中央に食堂があるが、古くなって雨漏りが著しい。イボイノシシの親子が訪ねてきて、よく前の砂浜で昼寝をしていった。（撮影：笹谷哲也）

した麓の道をたどると京大隊の基地があるカンシアナ谷に至り、だんだんと急になっていく斜面をそれとおぼしき方角に進路をとる。群れの遊動範囲には縦横に観察路が切り開かれていて、ガイドの二人が相談しながら道を選んでいく。上方でチンパンジーの呼び交わす声が私たちにも聞こえるようになった。最後は道を逸れ、ブッシュをかき分けて急峻な谷筋を詰めあがり、右手にようやくその姿を見出した。四、五頭のオス、メスがくつろいでいて、コドモが母親のまわりで遊んでいる。向こう側のブッシュの陰には西田さんが座り込んで、双眼鏡で彼らの行動をつぶさに観察し、ノートにとっている。彼の言うには、カンシアナの基地から真っ直ぐ上へ三〇分ぐらいでここまで着いたらしい。われわれのガイドはよく知らないから、結局ずいぶん遠回りして一時間以上かかり、すっかりくたびれてしまった。しばらくチンパンジーの様子を眺めていたら、リーダーオスを追跡していた伊藤さんがリーダーを追ってきてわれわれに合流する。お昼に近づいたので、お弁当持参の西田さんたちを残し、われわれは引き返すことにする。なるほど西田さんに教えられた道を行くと、ほぼ一直線にカンシアナの基地まで一気に下ることができた。

午後は船を出して釣りに行かないか、とのロッジ・マネージャーの提案にしたがい、二〇分ほど南へ下って釣り糸をたれる。私たちは持参のリール竿で疑似餌のスプーンを投げるが、一緒に来てくれた二人の男は、手釣り用の仕掛けを用意する。先端にかなり大きな錘をつけて、三本ばかり針をつける。餌も何もつけず、素針で糸を上下させ、まず餌にするためのダガーを釣り上げる。ダガーとはタンガニイカ湖特産の鰯の一種で、夜間灯りをつけてダガーをおびき寄せ、大きな網ですくい獲ったものを天日で干すとまさにダシジャコである。煮物をおかずにするが、市場価値も高い。剃刀でダガーの身を切り取って、こんどはそれを餌にして水中に沈める。何匹かの魚を釣り上げたが、一匹は六〇センチぐらいもあるクーヘであった。スズキの仲間で煮ても焼いても美味しいが、なんといってもこの魚は刺身にしてわさび醤油で食べるのが最高である。

マネージャーも歓迎するというので、夕食には西田さんたちを招待する。ロッジの使用人が釣ったクーヘを貰い、キッチンを借りて、調理する。ベベさんは山登りで大分お疲れのようだったので、きょうは憲子がさばいてお造りにする。スープから始まるキャンプの晩御飯は、豪勢で、そしてまた、クーヘの刺身もすばらしかった。

チンパンジーの群れがときに浜辺まで出てくることがある。そろそろやってきてもよいころだというが、私たちの滞在中には来なかった。ヒヒは近くまでやってきたし、イボイノシシが数頭、食堂のすぐ脇の砂の上で寝転んでいった。三日目の一三日に、もう一度チンパンジーを見たいと森へ出かけたが、これは空振りに終わった。西田さんたちもずっと奥の方へ追いかけていったようである。

マネージャーはイタリア人なので、是非スパゲッティをアルデンテに仕上げてくれと懇請する。南ア以来なんどかパスタを試してきたが、どこで食べたものもグチャグチャのものばかりだったのである。この日の昼食は最高傑作のひとつだったといってよいだろう。マネージャー自ら台所に立って、パスタを茹でてくれたのにちがいない。アフリカへ来て初めて食べたアルデンテであった。

次の日は昼食後、猛烈なシャワーに見舞われた。ちょうど食べ終わったときに降りはじめ、とても自分たちのテントまで戻れない。食堂の建物は古くなって、ちょうど建て替えようとしていたところであったが、古い屋根は雨漏りだらけ、みんな雨の当たらない部分に避難して、雨の過ぎ去るのを待った。一〇

月半ばはそろそろ雨季の到来する季節である。

ンゴロンゴロからセレンゲッティへ

一〇月一五日、帰りのヒコーキも順調に飛行し、アルーシャのマウント・メルー・ホテルに無事帰着した。整備の終わった車は、ホテルの地下の駐車場にちゃんと仕舞ってくれてあった。ショック・アブソーバーが四本いかれていたが、ザンビアのセナンガまでの悪路、そして、あのバンプの多かったアルーシャまでの道を考えれば、サスペンションに無理がかかるのもいたし方がないだろう。

アルーシャからンゴロンゴロまでは、きれいに舗装され、一九〇キロの道のりを二時間あまりで走破することができた。ンゴロンゴロは大きなクレーターになっており、三〇〇メートルほど下の火口湖まで反時計回りに降りていくが、道路は狭く、砂利道である。ゆっくりと下まで降りると、平らで草原となっている湖底にさまざまな動物が見かけられる。中心部には水を湛えた池があり、水辺がピクニック・サイトになっている。ちょうど時間もよし、私たちもランチボックスを開くことにする。エジプシャングースをはじめ、たくさんの水鳥が遊んでいるが、気をつけなければならないのがトンビである。上空に輪を描いて獲物を狙っているが、ここで彼らの好餌食となっているのは、何百人もの人々が広げているお弁当やお菓子だった。

草原の中に、私たちはチーターが何頭か座り込んで休んでいるのを見かける。車を止めて双眼鏡で観察していると、うしろから来る車もみな停まって眺めだした。ライオン、豹、チーターなど、見つけにくい肉食獣を見るには、車が群らがって停まっているところへ行ってみるのが、最も確実な方法である。クレーターの湖底から崖の急な登りにさしかかる直前の小さな川に車一台が通れるだけの狭い橋が架かっているのだが、そこに両側からきた車の群れがたまって渋滞している。橋のたもとのアカシアの木の上に豹が休んでいるというのだ。私たちのいる角度からは豹は見えなかったので、ただいらいらしながら、小一時間渋滞が解消するのを待つばかりであった。

クレーターの登りは大変な悪路であった。急な岩のごつごつとした斜面を四駆でゆっくりと登っていかなければならない。一周道路を経て、メイン道路にもどってから、いよいよセレンゲッティへの道となるが、舗装が切れたあとの道は、ものすごい洗濯板道路であった。道幅はたっぷりとあり、年に何度かはブルドーザーで均しているという。ならした直後は走りやすいが、たちまち凸凹ができはじめ、それがどんどんひどくなって波が大きくなり、洗濯板になってしまう。こうした道路は時速六〇キロ以上のスピードで凸の山の上っ面を飛んでいくように走るのがコツであるが、いずれにせよ車が受けるショックはすさまじく、当然乗っている人間様もつらい思いをする。洗濯板のメインロードから左へ分岐し、二〇数キロ草原の中を走って、薄暗くなったころ、ようやくサファリ・ロッジに到着した。すでにセレンゲッティ国立公園に隣接したところだった。

翌日は、公園のゲートに向かって一直線に北上し、ゲートのすぐ手前でメイン道路に合流する。ここから少し戻ったところに、二百万年前の初期人類の化石、オーストラロピテクスが出土したオルドバイ渓谷があるのだが、この洗濯板道路を往復する気力も失せ、そのままゲートをくぐってセレンゲッティの中へ進入した。公園の中は制限速度が六〇キロ以下と決められているお陰で、道は比較的スムーズだった。公園の中心地にあたるセロネラに達し、そこから今夜の宿泊場所であるロボ・ロッジへと真北に進む。ロッジは小高くなった岩山の上にあり、天然の大岩を巧みに取り入れて、うまく設計されたゴージャスな建物であった。建物のまわりの岩の上にはいたるところにロック・ハイラックスがうろちょろと駆けまわったり、くつろいだりしていた。

ズッパ号のルーフキャリアはここに来てついに修復不能に破壊し、重いタイヤを積んだままいつずり落ちて吹っ飛んでもおかしくない状態になっていた。ほとんどのボルトは抜け落ち、キャリアが天井にじかに乗っかっていて、前後左右に荷締めベルトでなんとか支えているだけという有様であった。天井の荷物を降ろしてなんとか二台の車に押し込み、ルーフキャリアはここで捨てていくことにする。一旦すべての荷物を降ろし、きっちりと積み直しをしていたら、プラスチックの箱に詰めてあった食料品のうち、コショウのビンが割れて、箱の中がコショウまみれになって

セレンゲッティ国立公園のヌーの群れの中を突き進む。
（撮影：藤岡悠一郎）

いるのを発見した。このガタガタ道路では、車も荷物も何とか持ちこたえてくれている方が不思議なくらいである。ジロー号のルーフキャリアの方は、早目からこまめにボルト締めしながら走ってきたので、まだなんとか持ちこたえてくれそうである。

翌一八日、今日の宿泊地セロネラへ戻る途中で、ハゲワシが何羽も舞っているのを見かけ、徐行して注意しながら近づいていく。いた、いた。ライオンの一群（プライドと呼ぶ）が木陰で休息をしているのである。メスが二頭、それにまだ小さなコドモが四、五頭、母親たちのまわりでじゃれあっている。オスはどこか近くにいるのだろうか、目にすることはできなかった。獲物の肉はほとんど食い尽くされて、ハゲワシはこれを狙って近くへ寄ってきていたのである。ライオンたちはもうお腹が一杯なのであろう、食後のひとときをゆっくりと過ごしている。セロネラまでもう少しという川岸には、カバが陸地に上がってきて歩いていた。カバは夜になってから草原の草を食べに上がってくる動物で、昼間は普通なら水の中にもぐっているものである。これは珍しい光景であった。

当初私たちは、ロボ・ロッジのそばを通って、真っ直ぐ北上し、ケニアへの国境を越えて、マサイマラ国立公園のキーコロック・ロッジへ向かう予定をしていた。ところが今は、この国境は閉鎖されていて、ビクトリア湖の近くまで一旦西進し、国境を越えたのち今度は東へ国境沿いに戻ってマサイマラの西口から入らざるをえないことが分かった。ものすごい遠まわりである。しかし、この道を通ったおかげでキーコロックまでの中間のかなり大きな川を渡るとき、橋の上から大きなワニが昼寝している姿を見る機会をえた。この時期、セレンゲッティとマサイマラを季節移動する百万頭を超えるといわれるヌー（ウシカモシカ）の大群がこちら側に移ってきていて、私たちはこの黒々とした動物の塊をうんざりするほど眺めつつ、キーコロック・ロッジに到着した。

キーコロックからナイロビまでは、ナロックを経由して、ナクルからの幹線道路に入り、一気に駆け抜けることができるはずだった。しかし、ナロックから幹線道路までの舗装は劣悪なもので、穴ぼこだらけ、それが補修されてないから、これなら砂利道の方がよっぽど走りやすいというものだ。悪名高いケニアの道路事情である。それでも私たちは、予定通り一〇月二〇日、無事ナイロビにたどりついて、フェアビュー・ホテルにチェックインした。

ケニア北部への旅

ここナイロビには住商の駐在員事務所があり、ズッパさんはいざ何か重大なトラブルがあった場合に備えて会社へ旅程表を置いてこられていた。ところが、それは最終案ではなく、少し日程の違った最終前のものだったのである。この間違った旅程表が本社からヨハネスバーグとナイロビにファックスで送られており、えらいご迷惑をおかけする結果となってしまった。ナイロビの事務所長冨田和雄さんが途中の滞在先であるはずのところへ、何ヵ所か電話連絡をされたのだが、一向に私たちの行方がつかめなかったということである。野村高史元副社長がアフリカ旅行中に行方不明になったと、住商本社ではずいぶん心配され、幹部周辺で大騒ぎしておられたらしいのである。ナイロビに到着して、ズッパさんはいち早く所長の冨田さんに電話されて、事態は収束した。

それにひきかえ、わが隊の留守本部島田喜代男ケロさんは、社長業が忙しすぎて、電話をしても常に留守電になっており連絡さえつけることができず、留守本部としての役割はまったく果たしてもらえなかった。明らかな

人選ミスだったといわざるをえない。

ナイロビはアフリカへの玄関口にあたるので、研究者たちもここを通過して、それぞれのフィールドへ向かう人が多い。日本学術振興会のアフリカ研究連絡センターが、もう四〇年近く前からここに事務所を置き、研究者を交代に派遣してきた。私自身も一九七六年から七七年にかけて半年間家族とともに駐在したことがある。いまは京大アフリカセンターの研修員、波佐間逸博君がセンターの維持管理と研究者の便宜のため駐在している。三年前からは、京大アフリカセンターも、東アフリカ研究の拠点としてここにフィールドステーションの事務所を設置し、ケニア、タンザニア、ウガンダで研究する人たちがナイロビに立ち寄ったときの宿泊所兼研究室となっている。今この事務所には博士号を得たばかりの孫暁剛君が常駐していて、これから行く北ケニアの旅に同行することになっている。

ここにはまた、ＡＡＣＫ会員で私の一学年下の杉山隆彦スリコさんが、ＪＩＣＡのスタッフとして在住している。彼は、タンザニアのタンガ中学の教師を経て、モロゴロのソコイネ農業大学（当時はダル・エス・サラーム大学農学部）で農芸化学の講師を長年務めたあと、ナイロビ北郊にあるジョモ・ケニヤッタ農工大学創設の中心人物として長らく教鞭をとり、いまはケニアの教育環境整備のために忙しく立ち働いている。

ナイロビに二泊してゆっくり休養をとったあと、孫君を含めた私たち九名は一路北を目指して出発した。一〇月二二日であった。ナイロビ市内の韓国料理店で食あたりし、体調をくずした私に代わって、この旅では孫君がハンドルを握ってくれ、私は久し振りに助手席でくつろぐことができ、大助かりであった。初日はアバデレ山国立公園の入り口にある町ニエリのアウトスパン・ホテルに投宿し、翌日はケニア山の登山口にあたるナロモル・リバー・ロッジのキッチン付コテージに移動した。山麓の渓流には、イギリスの植民地時代に放流されたニジマスやブラウン・トラウトが自己繁殖していて、絶好のマス釣り場がたくさんある。私たちは釣りを楽しみ、鱒の塩焼きを期待していたのだが、残念ながらこのところケニア山の上部にかなりの降雨があり、河川が増水していて釣ることはできなかった。

一〇月二四日、ナニュキの町外れで赤道を越えるので、看板の下で記念撮影をする。ついに北半球に入ってきた。ケニア山麓の海抜約二千メートルのハイランドから五百メートルのイシオロまで、一気に急坂を下りきる。肌寒かった高地から低地サヴァンナの叢原へ、灼熱の半砂漠へと気候もまた急変する。イシオロから先はいよいよ遊牧民、サンブル、レンディーレ、トゥルカナなど遊牧民の世界である。

車のトラブルで旅程の変更

イシオロの町外れにはポリス・チェックがある。ここから北へエチオピアまで、そして東へはソマリアまでの道は、無人地帯が延々と広がっており、ときに強盗団が出没したり、盗難車の密輸出が行われたりするので、しっかりと車のナンバーを控えてチェックしている。町をはずれると舗装はなくなり、たちまち洗濯板道路に変貌する。サンブル国立公園を左手に見て、アーチャーズポストを過ぎたところで、うしろからついてきていたズッパ号が停車し、無線が入る。車体の下で異音がするので点検するという。Ｕターンして駆けつけてみると、ショック・アブソーバーの上部のネジがはずれて下向きにぶらさがり、地面を引きずってガーッと音を立てていたらしい。ショック・アブソーバーなしでこれから五日間の悪路を行くことは不可能だ。いつスプリングが折れるか分かったものではないからである。

イシオロまで引き返し、真っ直ぐガレージに飛び込んで、新品のショック・アブソーバーに交換してもらう。再びポリス・チェックを通るが、今度は孫君がスワヒリ語で状況説明しただけでフリーパスで通過する。ところが、なにほどかも行かないうちに、またもや交換したばかりのショック・アブソーバーの上部がはずれてしまった。自分たちでなんとか修繕しようとするが、どうしてもうまくいかない。もう一度引き返してガレージで付け直してもらい再々出発、しかし、一〇数キロも行かないうちに、同じトラブルが発生した。上部のボルトを車体の穴に入れてナットで止めているのだが、あいだにかませてあるワッシャーが小さすぎて、洗濯板の凸凹でがたがた弾んでいるうちに、穴から抜け出し、外側へはずれてしまうようである。停車したまま、

なんとか修復できないか試みてみるが、やはり引き返して大きめのワッシャーに付け替えてもらうより仕方がないようである。悪いことは重なるもので、ちょうどそこへ対向してきたトラックの跳ねた石がジロー号の運転席側の窓ガラスにぶつかり、見事にヒビだらけになってしまった。触るとばらばらと崩れ落ち、怪我をしないように破片を全部とりのぞく。ポリス・チェックのお巡りさんたちも、さすがに何度も修理に戻ってくる私たちを気の毒がってくれた。

ショック・アブソーバーはワッシャーを取り替えることでなんとか落ち着いたようだが、窓ガラスはイシオロには在庫がなく、ナニュキかケニア山の東麓の町メルーまで行かなければ手に入らないという。距離の近いメルーへ行くことにする。ガラス屋の前の泥道に駐車したまま、店員が小一時間かかって新しいガラスを入れてくれた。昼を過ぎ、お腹がすいたので、道端で売っている食べ物を買い込み、走りながら昼食とした。孫君と私が運転を交代し、かわるがわる食事をしながらイシオロに戻ってきたが、時刻はすでに二時を過ぎていた。とても今日中には孫君の調査地であるレンディーレの村まで行き着くことはできないので、今日はイシオロ泊まりとする。

町で一番上等といわれるボーメン・ホテルに入るが、部屋は狭く小さな廊下に面した窓が一つあるだけの牢獄のような部屋だった。みんなで今後の予定を相談する。カイスト砂漠でラクダを遊牧するレンディーレを見て、さらに北西へ、トゥルカナ湖畔のオアシス、ロイヤンガラーニのオアシス・ロッジで二泊休息してから南下してナイロビへ帰着、あと六日間でこのたびの旅行を終える予定だったのだが、人間も車も悪路の長旅で疲労困憊の有様である。若者たちは疲れを知らず、なんとしても予定通り強行したがったが、べべ夫妻、ズッパ、私と六〇歳をはるかに超えた老人には、このあたりが限界と判断し、予定を変更して、も少し楽な行程を行くことにする。

アバデレ国立公園からマララルへ

植民地時代からあるサファリの基地、ニエリのアウトスパン・ホテルまで引き返してここで二泊休むことにする。中一日をのんびりと過ごし、午後のアバデレ・ツアーを予約する。若き日のエリザベス女王が宿泊した山腹のトゥリートップ・ホテルまでまずバスで送られる。古い木造り建物の三階ベランダの広々としたスペースから、巨象が水場に遊ぶ姿を見下ろしながら、コーヒーを飲んで一服する。

二台のサファリ・カーに分乗し、アバデレの山道を見物してまわる。標高が二千数百メートルあるので、植生はモンテン・フォーレストのゾーンで、高木の優占樹種はビャクシンとマキの仲間である。繁みが深いので、動物は窪地の草原でしかなかなか見られない。曲がりくねった道が森を縫って、そうした草原のビューポイントを順繰りにたどっていく。イボイノシシやインパラ、ブッシュバックの群れが草原には散見され、ときにはブッシュをかき分けて木の葉を食む大きな象の群れを見かけることもある。緑色のきれいな中型の鳥、エボシドリが一羽、木の上に止まっていた。車を停めると、鳥はすぐ飛び立ったが、広げた翼の下面は鮮やかな緋色で、アフリカではもっとも美しい鳥の一つである。

最高地点の草原の展望台にはいくつかのベンチが置いてあるが、寒くてゆっくり休んでいることもできなかった。ぽつりぽつりと雨が当たってきて、下りは立ち上がって見晴らすために開けていた天窓を閉めきり、帰りを急いだ。

一〇月二七日、ニエリから北西に進路をとり、ニャフルルまでまずまずの舗装道路を順調に走り抜ける。まもなく舗装はなくなり、砂利道となるが、それほどひどい道ではない。北緯一度を少し越えたマララルが、変更した今回の最北の地点である。丘の中腹の古い丸木小屋のロッジに二泊し、ゆっくりと高地の草原と畑を見渡して旅の疲れを癒した。ロッジのまわりには、シマウマとインパラとイボイノシシ、サヴァンナモンキーが多数草を食んでおり、はるか彼方に見える向かいの丘陵地帯には農耕、牧畜を営むサンブル族の家々とトウモロコシ畑が見晴らせた。

翌日は朝のうちに町の市場までビーズ細工などを買いに出かけた。サンブルの若者は男も女も無類のおしゃれ好きである。年齢階梯制をもつ社会であり、男は割礼を受け、成人式を終えるとモラン（戦士）の階梯に属するようになり、長髪を真っ赤に染めてきれいに編み上げ、からだ中にも赤い顔料を塗りこめ

る。赤白のチェックの腰巻を巻きつけ、長い槍を手にすると、これが戦士の正装である。女性は恋人のモランからたくさんのビーズ細工の首飾りをプレゼントされ、やはり真っ赤に顔料を塗りこめたからだに、あるだけの首飾りをかけて飾りたてる。若者たちのこうした扮装と天に向かって一斉にジャンプする踊りは観光客のカメラの格好の対象となっており、いまや彼ら若者たちのよき収入源ともなっているのである。午後は、私たちはロッジで休んで過ごしたが、元気な若者たちは、一度ラクダに乗ってみたいと、キャメル・ライドのツアーへと出かけていった。

ナクル湖のサイとフラミンゴ、そして旅の終わりに

帰りは、マララルから四〇キロばかり元来た道を南下したのち、西へと進路を変え、バリンゴ湖を目指した。このあたりは、イルチャムス、そしてポコットが遊牧生活をする領域である。もうすぐバリンゴ湖へ着くという直前に、ズッパ号からまたまた緊急の無線が入った。今度は車体の下の方で金属的な音がするというのだ。急遽Uターンして一緒に下まわりを点検する。左側後輪の板バネが一枚折れていた。七枚のうちの下から三枚目であった。折れた切れ端がカチャカチャと金属音を発していたのである。応急処理としては、ガムテープなどでぐるぐる巻きに縛っておくぐらいしか手はない。もう少しでメイン道路に出るので、とりあえずはゆっくりと走ってこれ以上のダメージを与えないようにするしかない。

バリンゴ湖からナクルへ南へと走る道路は、モイ前大統領の地元なので、彼が大統領に就任するやいなや、いち早く舗装工事が行われた。しかし、当初立派な舗装道路と思われたこの道は、いまや穴ぼこだらけのひどいものに変貌している。一〇センチから一五センチの厚みで敷き詰めるべきアスファルトが、ここではほんの二センチばかりしか敷かれていない。工事予算の大部分を高級官僚など一部の人たちが着服してしまった結果にちがいないのである。

ナイロビに帰着する前の最後の日は、ナクル湖国立公園で過ごすことにしていた。いままでに見ることができなかったサイとフラミンゴを見るためである。よほど運がよければ豹に出くわすこともできるであろう。午後にナクルに着いた私たちは、半時計まわりにそれほど大きくもない湖をまわり、湖岸に車を置いて、フラミンゴの大群でピンクに染まった湖面にしばし眺めいった。湖の南端をまわり、ロッジに向かう途中の草原では待望のサイを見ることができた。大きなサイが二頭、のんびりとくつろいでいた。豹はやっぱり見ることができなかったが、私たちは、アフリカの代表的な動物をほぼカバーし尽くしたこ

ナクル湖を埋めつくしたフラミンゴの群れ。湖はピンクに染めあげられている。（撮影：孫 暁剛）

ナクル湖国立公園の中でついにサイを見つけた。左の小動物はイボイノシシ。（撮影：孫 暁剛）

とになる。
　レイク・ナクル・ロッジの豪華なたたずまいの中で夕方のひとときを過ごし、サファリの最後の夜のために、冷たいビールで乾杯した。このロッジの夕食はバイキング形式で、どの料理もとても美味しかった。食後はいつものようにバーにたむろし、ウイスキーの水割りを嘗めつつ、残り少ないアフリカ滞在を惜しんだ。
　翌一〇月三〇日朝、目前に広がる草原と湖面を見下ろしながら、ロッジを出発する。最後のアフリカのドライブ。ナイバシャまでの七〇キロほどは悪名高い穴ぼこだらけのでこぼこの舗装だが、残り八〇キロばかりは素晴らしいきれいな道である。一〇時ごろにはナイロビの町に帰着した。荷物を整理するため、学振の波佐間君のところへ直接乗りつける。
　レンタカーとともに借りた装備と自分たちの個人の荷物を除いて、マットレスなど多少の装備と食糧、飲料をすべて放出し、学振のオフィスに寄贈した。孫君をはじめ、ここに立ち寄る研究者の方々に多少の役に立つものがあれば幸いである。ホテルへの道すがら、孫君のオフィスの前を通って、定期的に開かれる露天市へ立ち寄り、ベベさんや憲子たちが欲しがっていたサイザル麻の籠を買い込んだ。ベベさんは毎日の買い物にアフリカ製の大きな籠がどうしても欲しいといっていたのだ。丸山、村尾の若いお嬢さん方もいろいろ買い物をしたようだった。それからようやくフェアビュー・ホテルに到着する。もうこれ以上車は走らせない。南緯三五度から北緯一度までの一万八千キロにおよぶアフリカ縦断の旅は無事終了した。
　翌三一日朝九時に、約束どおり南アから二人のドライバーがホテルに車を引き取りにきた。彼らはこれから一週間、モンバサでバカンスをとったあと、五日間でヨハネスバーグまでぶっ飛ばして帰るということである。折れたスプリングに予想通り荷締めベルトをぐるぐる巻きに締め付け、荷物はできるだけ健在なジロー号の方へ積み込んでホテルをあとにした。
　レンタカーを返して、われわれの車の旅は本当に終結した。ナイロビ在住のさまざまな方々にお世話になり、一一月一日夕方、私たち年寄り組五人がナイロビ空港へ向け、ホテルを出発する際に、隊は解散した。若い三人はまだしばらくナイロビに滞在し、結局、孫君に連れられてレンディーレを訪れたとのことである。およそ一ヵ月後には、全員が無事に日本に帰国した。
　アフリカ縦断の旅はこうして無事に終わりを告げた。最後には車も悲鳴をあげ、われわれＡＡＣＫ組も長旅の限界を感じていた。やはり、アフリカの旅は厳しいものであった。六九日間におよぶ長い車の旅はしんどく、諸般の事情が許したとしてもカイロまで一気に行くことは無理だったろうと思われる。アフリカ大陸は広く、そしていろんな意味で雄大であった。アフリカ諸国はいま実にさまざまな困難を抱えている。しかし、アフリカの人々はめげず生き抜き、そして底抜けに明るい。あの明るさがあるかぎり、アフリカは永遠に生き続けるだろうと私には思われるのである。
（第三部　完）

南極観測五〇周年記念
第一次隊員　芦峅の五人衆に聞く

新井　浩

「西堀栄三郎記念探検の殿堂」では、南極観測五〇周年記念として、種々の記念事業を行っている。地元の子供たちに探検の魅力を植え付けようと、キッズ探検隊を立ち上げ、冬山経験や、観測船の見学など実施しており、今回は立山へ出掛け、第一次南極越冬観測隊を影で支えた芦峅の男たちに会いに行こうとの企画であった。
　主催はキッズ探検実行委員会、協賛は立山カルデラ砂防博物館と京都大学学士山岳会、湖東西堀研究会。
七月一五～一七日　「立山室堂へ行こう!!」
行動予定は、第一日　立山カルデラ砂防博物館見学、室堂山荘でスライド、映画上映。
第二日　一の越登山、地獄谷探検、雷鳥荘泊。
第三日　黒部ダムを通って帰宅。
　探検の殿堂に当初から関与している井上潤氏に誘われ特別参加することになり、ＪＲで立山にて追い着く。既に見学は終了していたが、会議室でのフィルム上映には間に合っ

た。

講師は佐伯宗弘・栄治（二人は第一次隊員）、渡邉興亜（元国立極地研所長）、飯田博物館学芸員、立山山岳ガイド。

出席　小学生キッズ隊員一一名、野村館長・角川女史リーダーなど大人九名。西堀家から暁子（次女）・峯夫（三男）、故佐伯富男（越冬隊員）の長男高男さん、ＡＡＣＫ二名。

故富男隊員のフィルム上映（スクリーニングした為、鮮明な画面であった）。宗弘隊員のアルバムよりスライド上映（南極持参のカメラを殿堂に寄贈された）。このあと、質問時間あり。

ケーブル・バスを乗り継ぎ、室堂ターミナルへ。お天気は最悪で、雨具をつけて室堂山荘へ。殿堂で経験した南極ブリザード以上の物凄さで、子供たちは驚いた様子であった。

この夜は、渡邉さんのスライドによる南極観測話で、やや難しい講話であった。

お天気の悪化で、予定を変更し、あくる日は黒部ダムを見学したあと、急遽引き上げることになった。（弥陀ヶ原バスは、我々が降りた後、運行停止になったとのこと、正解であった）。

以下、伺ったお話を思い出して書き綴っておこうと思う。

一、西堀家サイドから、父栄三郎が「若いときから、さらに南極の時も芦峅の皆様には大変お世話になった」と生前よく話をしていたと御礼の挨拶をされた。

二、立山のガイド衆が、何故南極観測隊に加わったかは、西堀さんの強い働きかけ、主張があった。

三、昭和九～一〇年の京大白頭山遠征隊に三人の立山ガイドを連れて行き、西堀さんは極寒に強い彼らの実績をよく承知していたからである。

四、北大よりの強い推薦で、山岳部出身の故佐伯富男が越冬隊員に選ばれたが、設営担当として、彼は故郷の立山ガイドの五人を選抜してきた。

五、その時の二人が本日出席されている。佐伯宗弘八一歳・佐伯栄治七九歳である。奇しくも宗弘氏は白頭山の時のガイド・栄作さんの息子で、選抜五人衆のリーダー格であった。

六、出発前、設営班は、晴海埠頭の倉庫前で、越冬小屋の組み立て訓練を行った。さらにテント設営を試みた。

七、初めての海外渡航で、盛大な見送りを受けた。船酔いについては、宗弘氏は比較的強く、ドクターの伊藤洋平氏は一番弱かった。付けられたあだ名は、「ヨーヨッペイ（酔う洋平）」であった。しかし、ドクターとしては実に親切であった。

八、赤道祭など楽しい思い出が多い。寄港地上陸では、こんな旨いものがこの世にあるのかとご馳走に驚いたりした。船上の餅つきの場面は、俺たちの出番で張り切ってやったものだ。

九、犬たちは、お天気の時は甲板に個別に鎖で繋がれた。船が大きく揺れる時は、鎖の支点を中心にして、右へ行ったり左に行ったりして、足を突っ張るのである。ユーモラスに見えるのであった。餌は日に二回であった。

一〇、甲板上のウンコの清掃役を受け持った。海水をホースにて掛け流すのである。このように力仕事は何でも来いであった。

一一、最上部の永田・西堀・村山の諸氏は、まったく雲の上の人で、我々下っ端にはよく判らなかった。

一二、東オングル島に上陸し、最初の仕事は、テント設営で、いわば飯場づくりであった。ここで運搬設営の作業が始まる。宗弘は富男越冬隊員と同一テントで暮らした。引き上げるまでの一ヶ月間、風呂に入らずのテント生活であったが、平気なものであった。一般隊員は、船に戻って風呂に入っていた。

一三、一番しんどかったのは、運搬作業であった。船から二七㎞の距離があった。特に建物のパネルが重たかった。地ならしに結構時間を喰った。組み立ては一棟あたり約二日かかったがたいしたことは無かった。三棟と発電棟を建てた。夜といっても明るく、昼夜の区別がなく、酒を飲んで四時間ばかり眠ったに過ぎない。カレンダーに印をつけて毎日を過ごした。

一四、熊狩り用の村田銃を持っていった。犬のエサとして、アザラシを撃った。

一五、酒はものすごく沢山あった。濃縮の日本酒はダメ、旨くなかった。洋酒は初めての銘柄ばかりであった。一年たって、第二次隊がはじめて西堀隊へ物資を運んだ時、なんと

酒ばかりで西堀を激怒させている。基地にはくさるほど沢山あったのである。

一六、越冬隊を残して全員が観測船宗谷で引き上げる時、最終組になったのが、五人衆。記念の思い出にと、南極大陸を踏んでくることになった。村山さんに引率されて歩いて大陸にわたった。各自が長い竹ざおを持ち、海面の割れ目に気をつけて渡ったのである。記録に記述されていない事実である。

一七、北村泰一さんは、若くてとても熱心な人であった。

一八、基地がホワイトアウトになった時、犬が脱走したことがある。この時、宗弘は西堀さんより、「君のオヤジは白頭山のとき、ワシの命令をよく聞いたぞ」といわれ、犬探しの為に已む無く、怖い白の世界に突入した。幸い犬を見つけ、無事基地に戻ることが出来た。

一九、縁の下の力持ち的働きをした芦峅寺の五人衆は、力量を十分に発揮して高い評価を得た。五〇年経った今でも、いろいろと覚えているとのこと。帰国後、家族を呼び、一同二重橋前で、記念撮影をおこなったことは、忘れがたい。

二〇、「今一度南極へ行ってみたいか」との質問には、微笑むのみで返事は無かった。多分、子供・孫にはこんな苦労をかけさせたくないとの思いではなかろうか。

二一、その他。

キッズ探検隊の一行は、帰路芦峅寺の故佐伯富男氏の墓参りを行った。息子の高男さんの案内で、由緒正しい名家らしい立派なお墓に頭をさげてきた。

追伸「探検の殿堂」の所在地名が湖東町から「東近江市」に変更されました。

中・高年登山者のための一五の医学的備忘録

松林公蔵

はじめに

日本の社会の高齢化が始まったのは、近々、ここ五〇年以内のことである。

今世紀初頭に四三歳であった我が国の平均寿命は、一九三〇年になっても四五歳にとどまっていた。それに比べて、戦後の平均寿命の伸びは、戦前とは対照的である。一九四七年に五〇歳の関門を超えた後、一九五〇年には六一歳となった。しかし、当時の欧米諸国とくらべると、まだ低い水準であり五～七歳は低い。欧米諸国の水準に仲間入りしたのは、男では六五年ころ、女では七〇年ころのことであった。そして、八六年には、世界のトップにおどりでた。

現在では、男は七八歳を、女性は八五歳を超えている。

今から五〇年前の六五歳以上の高齢者の割合は五％未満であったが、日本の高齢化のスピードはすさまじく、一九七〇年の七％（高齢化社会）から九四年に一四％となって、二四年という史上最速の速さで高齢社会に突入した。現在、高齢者の割合は二〇％をこえている。

かつて、登山や探検という営為は、少・青年層の特権であった。しかし今や、登山人口の多くが中・高年者となった。

少・青年たちは、特別の場合以外は病気のない健康体と考えてよい。しかし、中・高年者は、特別の場合を除いて何らかの加齢に伴う疾病をもっている。したがって、中・高年者の登山では、登山中にたまたま遭遇する事故以外にも、自己の体力の限界や疾病に留意する必要があり、体力の低下や疾病が事故を招きやすい事実を認識しておく必要があるだろう。

以下、中・高年者が登山を行う場合の留意点を一五条の備忘録としてまとめてみた。

中・高年登山者のための医学的備忘録

（一）大自然の山々は、自分の庭を訪れる登山者の〝年齢〟について、またその登山者が〝病気〟をもっているかもしれないことを知らない。

（二）「敵を知り、己を知らば百戦危うからず」中・高年の心ある登山者は、対象地域に関する聞き取り調査や文献検索に若者よりも熱心である場合が少なくない。また、トレーニングにもむしろ熱心である。それ故にこそ、自分の年齢と体力、かかえている医学的課題を十分に理解しておくことが重要である、そのためには、事前のメディカルチェックが有用である。

（三）中・高年者の医学的特性

・ひとりで多くの病気をもっている。
・症状が非定型的である。
・個人差が大きい。
・薬剤に対する反応性が若者とは異なる。
・生体防御力が低下しており、疾病がなおりにくい。
・容易に精神・神経症状をあらわしやすい。
・病気の予後が、医療のみならず、社会的環境により大きく影響される。

(四) 中・高年者登山者の留意すべき疾病
・Dead Quartet（高血圧、糖尿病、肥満、高脂血症）
・心臓病
・脳卒中
・それに、加齢現象がくわわっている。

(五) 中・高年者の登山で留意すべき病態
・転倒→骨折
・発汗、下痢→脱水、意識障害
・感冒→肺炎

(六) これまでの老年医学に関する縦断的研究によって、人の記憶力、視力、聴力、身体バランス、反射神経は、加齢とともに確実に低下することがわかっている。しかも、その個人差は、加齢とともに増大する。

(七) 若いときに比して、スピードは確実に落ちている。決して急がないことが重要である。「競争」という概念は、社会的存在である人間の本能ではあろうが、中・高年登山にはふさわしくない。

(八) 急性期疾患を除いて、山登りに絶対禁忌の疾病はきわめて少ない。

(九) 〝肥満〟は、重力に抗する山登りにおいて、大きなハンディキャップとなる。体重八〇キロの登山者は、体重六〇キロの登山者に較べて、最初から二〇キロの荷重プレミアムがついていることになる。ただ、肥満者は、長期の篭城の際には有利かもしれない。

(一〇) 高血圧や高脂血症の治療薬は、通常通り服用を継続する。登山中の一時的な血圧変化に対して、一喜一憂する必要はない。新米の医師が山岳診療所に勤務している場合におこりがちな事態ではあるが、原則として、山中での特段の降圧はさけるほうがよい。

(一一) 山で発病する病気で、「絶対安静」を要する病態はほとんどないと考えてよい。安静を保つためにいたずらに時間を空費せず、ただちに、下山する方策を講じるべきである。

(一二) 高所トレッキングや高所登山における「高山病」の理解
①二五〇〇m～四〇〇〇m
急性高山病（頭痛、食欲不振、下痢、睡眠異常、浮腫、全身倦怠、動悸、息切れなど）―通常は馴化可能、しかしできない場合もある
②六〇〇〇m（〝魔の六千メートル〟）
高所肺水腫、高所脳浮腫―高度を下げる以外に治療法はない―
③八〇〇〇m以上
判断力の低下

(一三) SPO_2値は、隊員の健康状態を比較するのに参考としがちではあるが、個人差が大きいことも知っておくべきである。馴化の速度にも個人差があるので、個人における経日的変化をこそ参考とすべきである。

(一四) 中・高年者登山の医学的処置に対する留意点
・異常を発見したらまず下山を考える。
・安静を保持して山中で様子をみることを避ける。
・水分補給（事情が許せば点滴が有用）
・糖分補給（事情が許せば点滴が有用）
・解熱処置（嘔吐する場合もあるので座薬が有効）
・搬送が必要な場合もある。
・命令よりも愛護的な説明が重要である。
・下山後の収容態勢を山中から考えておく。

(一五) 「失敗は、成功の母である。しかし成功体験は、失敗の父でもある」（堺屋太一）という格言は、中・高年登山において心すべきである。

おわりに

登山という営為は、以下のようなすばらしい特性がある。
・あらゆる年齢階層が、それぞれの考え方、方法によって参加可能ないとなみである。
・体力、経験、事前の学習、知力、想像力を駆使して実行する、「総合」かつ「創造」的でかつ優れて精神的ないとなみでもある。
・事故をおこさない限り、「敗者」のいない、闘いでもある。
・目標は、個々人によってそれぞれ異なるものながら、「達成感」は、多くのスポーツに勝るとも劣らない。

山登りという、かくも、知的で創造的ないとなみでありながら、山に登ることを欲し、それに向かって努力する人間であれば、年齢

を問わず、またその天性の能力の差をも包摂してしまうほどに、誰に対しても公平で優れた精神性をあたえてくれ、また「山」なくしては触れることの出来なかったであろう大自然の美しさと脅威とを通じて、ともに同じ体験を共有する生涯の友を得る機会に恵まれた「京大山岳部」の先輩、同輩、後輩の〝えにし〟に感謝いたします。

（本稿は、平成一八年九月五日に京大会館で行われた日本山岳会医療委員会主催の一般登山者のための講演会で講演した要旨をまとめたものである。）

栄誉・受賞のお知らせ

松浦祥次郎会員は、今年度秋の叙勲において旭日重光章（きょくじつじゅうこうしょう）をご受章になりました。

山本紀夫会員は、「アンデス・ヒマラヤにおける高地民族の山岳人類学的研究」により、日本山岳会の平成一八年度（第八回）秩父宮記念山岳賞を受賞されました。

なお、平成一七年度秋の勲章・褒章において、野村高史会員が藍綬褒賞を受賞されておりますことを、遅ればせながら併せてお知らせいたします。

会員異動

お尋ね

左記の会員の現住所、消息などご存知の方は、事務局　吹田啓一郎　までお知らせ下さい。

中村真会員、高橋太郎会員

編集後記

『川旅　シーンジェック』は、昨年新設されたＡＡＣＫ海外登山・探検助成制度の第一回適用計画です。北極圏の単独の川旅という今までにない新鮮な報告を頂きました。

『アフリカ縦断の旅』全三部が完結しました。悪路との戦いにさすがにタフな日本車も音を上げたようですが、六九日間もの長旅を皆さん無事帰国されたことに敬意を表します。

『中・高年登山者のための一五の医学的備忘録』を服用し、登山を楽しみたいものです。そのほか今号は、カラコラム、南極、人物抄と話題は地球を駆けました。次号は雲南、チベットの話題を御願いできればと思っています。なお、原稿締切日は平成一九年二月一〇日、発行は三月下旬を予定しています。ご寄稿をよろしく御願いいたします。（田中昌二郎）

編集委員　田中昌二郎
発行日　二〇〇六年一二月末日
発行所　京都大学学士山岳会
〒六二五―八五四〇
京都市西京区京都大学桂
京都大学工学研究科建築学専攻
吹田啓一郎　気付
製作　京都市北区小山西花池町一―八
（株）土倉事務所